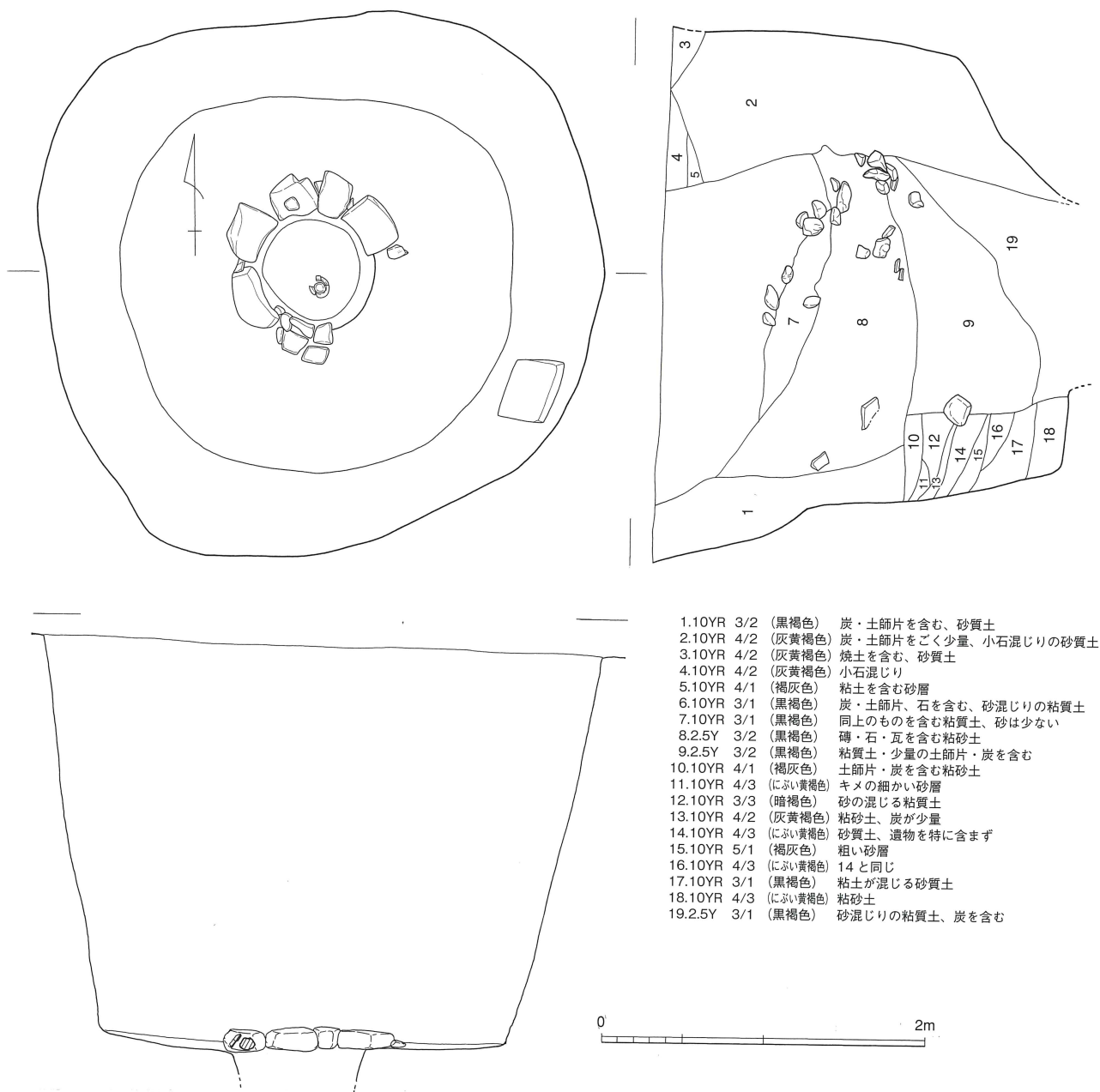


(4) 井戸

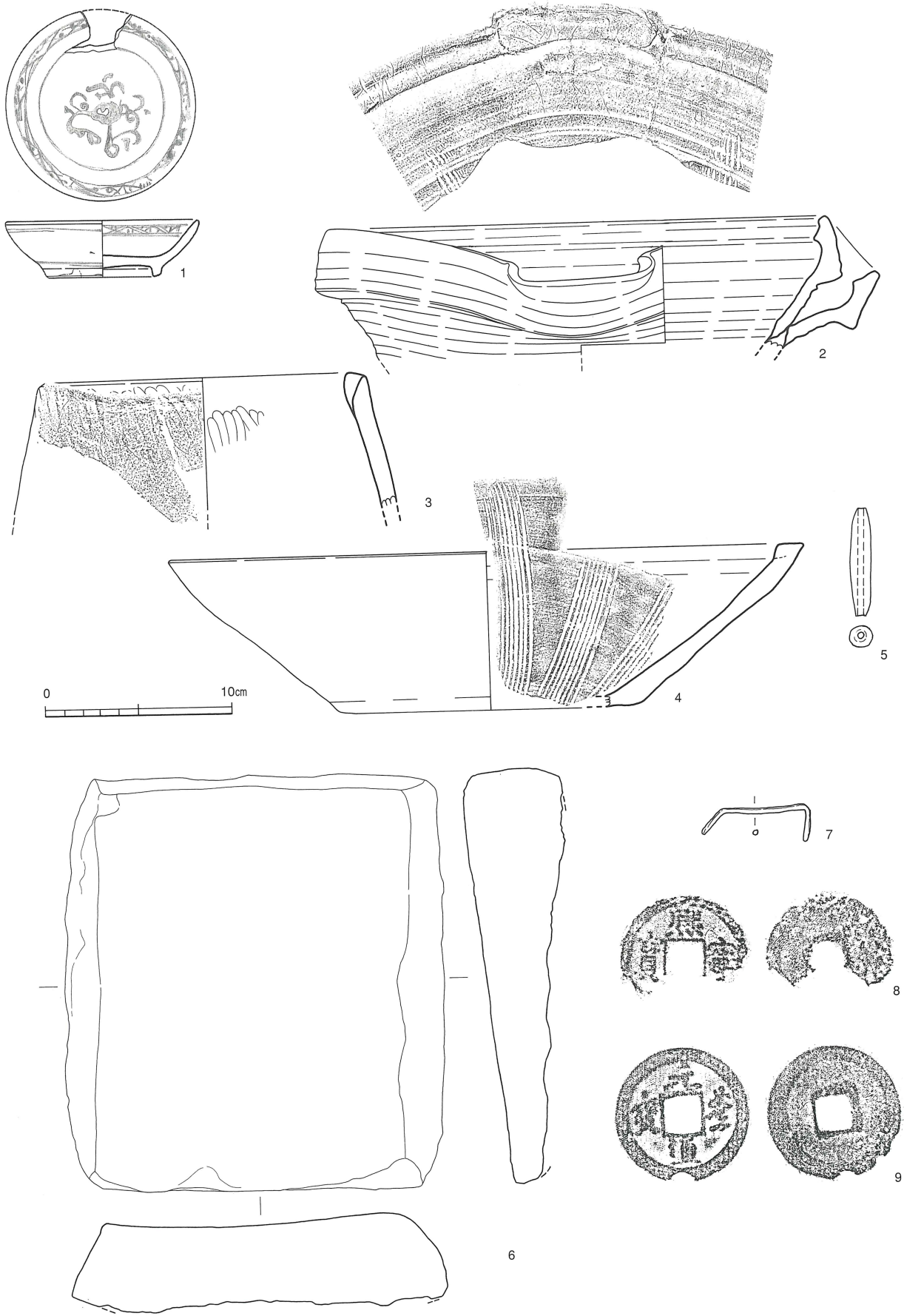
府内町跡51次調査南部地区では数基の井戸を調査した。掘削が深くなるため、事故防止の観点から途中で終了し、完全に調査したものは少ない。井戸は、遺物包含層を除去直後に検出されるものと、第2南北街路を除去後に検出されるものがある。全体的にこの調査区は、第2南北街路を中心としているため、町屋部分の発掘調査に比較すると、井戸の検出件数は少ない。

石塔の部材
六角形

SE201 第191図に図示したSE201は万寿寺の境内で検出された井戸である。井戸は直径約3.4mの不整形円で掘削し、検出面から2.5mの位置で水源を検出している。この水源に対し直径約60cmの結桶を据え、集水装置としている。結桶の上面には花卉状に阿蘇凝灰岩の板石や石塔の部材を並べている。中世大友府内町跡の類例では、このような石材の配置がある場合、この上に阿蘇凝灰岩の切石を一段六枚で六角形に組立て、数段積み上げて井戸側としている。しかし、土層観察では、井戸廃絶



第191図 SE201実測図(1/40)



第192図 SE201出土遺物実測図 (1/3) 6(1/6) 7(1/2) 8・9(1/1)

後に、こうした井戸側の部材は抜き取られていることが判る。

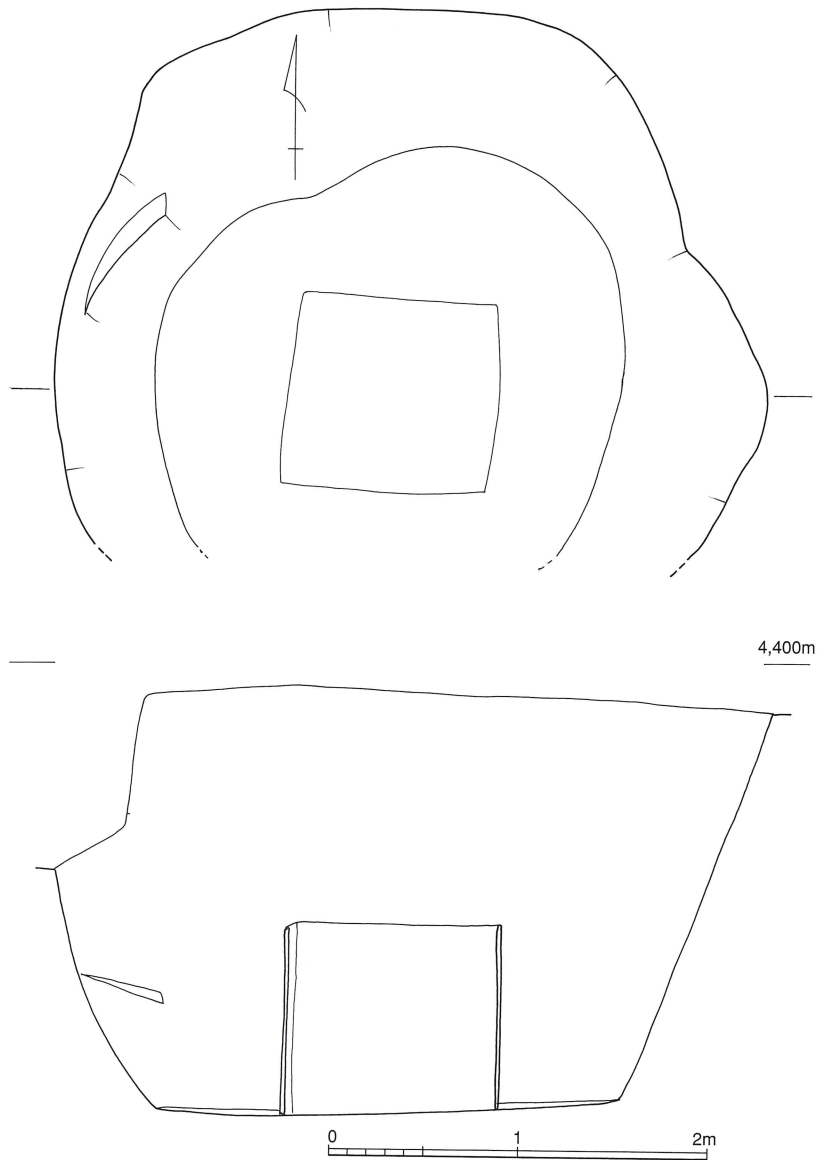
井戸側の部材 そうした中で、第192図6に図示した凝灰岩の板材は井戸側の部材である。縦44cm、横40cm、厚さ10cmで、組合せるため側面を斜めにカットしている。このため石材の断面は台形になる。また、内側は、全体で円形に仕上げるため緩く弧を描いている。この部材は、井戸の埋め土の上位から出土しており、裏面が大きく剥離していることから転用をあきらめ、廃棄したものであろう。

漳州窯系青花 この他の出土遺物である第192図1の漳州窯系青花の皿は、集水装置である桶を埋めた後の上面に置かれたような状態で出土しており、井戸廃棄の祭祀行為と関連すると考える。2は備前焼の播鉢で、内面には放射状の播り目がある。3は瓦質土器で、内外面は縦方向のヘラ磨きで調整されている。内湾する口縁部は、一部斜めにカットされ、片口状になる。4は瓦質土器の播鉢で、内面に放射状の播り目が認められる。5は紡錘形をした土錘で、6.5gである。7は器種不明の細い銅製品である。8・9の銅銭の銭貨名は、8の一部は欠けるが、1068年初鑄の「熙寧元寶」である。9は1078年初鑄の「元豊通寶」である。

図化した遺物は以上であるが、これ以外に、京都系土師器の小破片や瓦質土器、備前焼の破片も多量に出土している。

井戸の時期は出土遺物から16世紀後葉と考えるが、万寿寺の堀の西側を切っており、新しいと言える。すなわち、万寿寺の堀が埋め立てられ、町屋化した後に築かれた井戸と言え、第2南北街路沿いに万寿寺の堀を埋め立てて誕生した町屋の裏手に設置された井戸である。廃絶については、天正14年の島津氏侵攻後の可能性が強い。

SE310 第193図に図示したSE310はI・J33の第2南北街路を除去後に検出された井戸である。上面は前項で報告した16世紀後葉の土坑が掘り込まれている。井戸の規模は、上面直径約4.7mの範囲で掘り下げ、深さ2.3mで湧水点を確認し、集水装置や井戸



第193図 SE310 実測図 (1/40)

側を設置したと想定できる。しかし、明確な集水装置は確認できず、井戸側も板材が腐敗しスタンプのみが確認できた。それによると、井戸側は方形で一辺1.5mの規模で立ち上がっている。

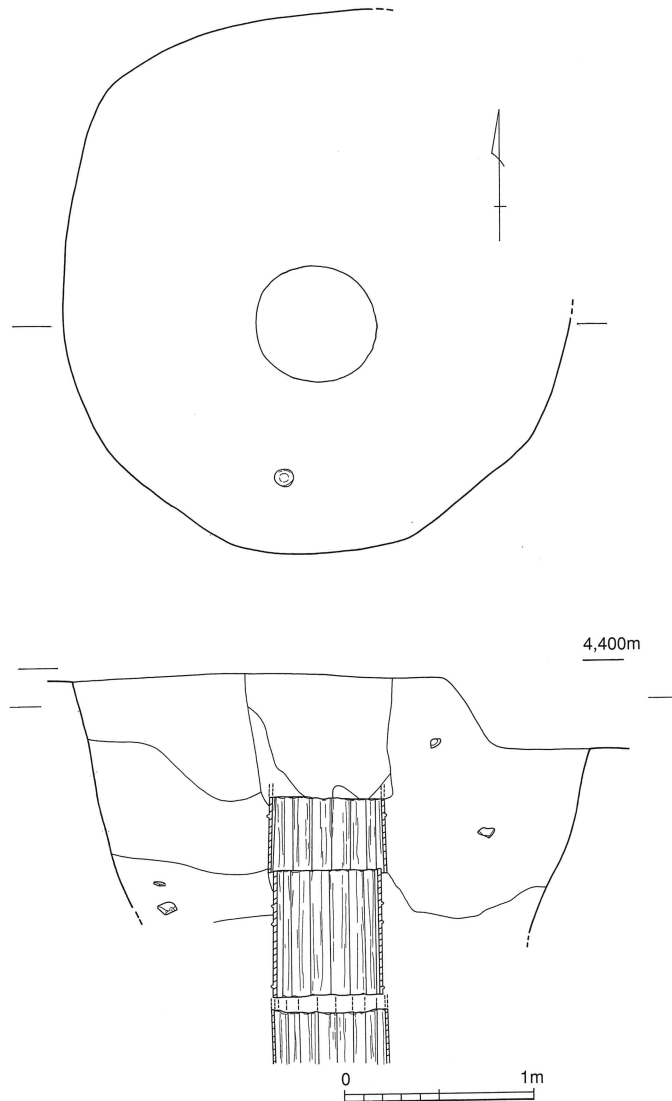
中世大友府内町跡の14世紀代の井戸の多くは、集水装置に曲物を使用し、井戸側は四隅に柱を建て、横板を積み上げる方式のものが多い。SE310の残りは良くないが、同じ様式である可能性が高い。

遺構内からの出土遺物は、第195図1～6に図示した。1～3は糸切り底の在地系土師質土器で、1・2は口径8cm台の皿である。3は坏で口径は9.8cmである。4は紡錘形の土錘で、重さは6.2cmである。5は半分を欠くガラス製品で、中央に穿孔がある。大きさは直径1cmで、重さは半分で0.7gである。6は瓦質土器の播鉢で、内面に播り目が刻まれている。

ガラス製品

遺構の時期は、上面を16世紀後葉の土坑が切っており、出土遺物に京都系土師器を含まず、在地系土師器が出土していることから、14世紀代と考える。

SE453 第194図に図示したSE453はSD363のK35で検出された井戸である。両者の関係はSD363が埋め立てられた後に、井戸であるSE453が築かれている。調査は遺構検出後、半裁して掘り下げを行ったが、位置が調査区の東壁に接し、地下水が染みだしてきたため、崩落の可能性が生じ、途中で断念した。



第194図 SE453 実測図 (1/40)

結桶三段

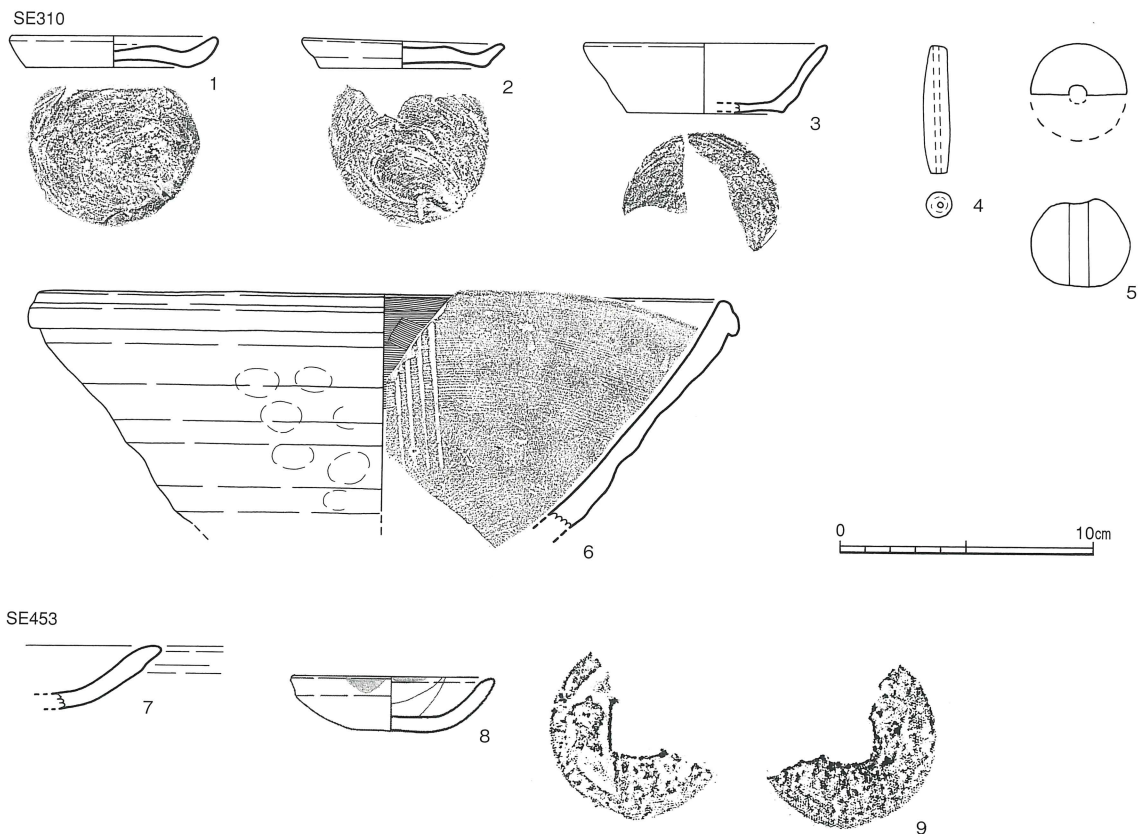
確認できた遺構の規模は、直径約2.7mの掘り込み面で掘り下げ、湧水点を検出後、直径約60cmの桶を井戸側に行っている。発掘調査は、検出面から約2m掘り下げた場所で崩落の危険性が生じたため終了したが、井戸側は結桶三段を確認した。

遺構内からは、京都系土師器や瓦質土器が出土したが、いずれも小破片が多く、第195図7～9に図示したものは、比較的大型の破片である。7・8は京都系土師器で、8は口径8cmで、灯明皿として再利用されている。9は銅銭の破片である。銭貨名は一部読めるが不明である。

御内町

井戸の時期は、京都系土師器が出土することや、SD363の上面で遺構が確認されることなどから、16世紀後葉と考えられる。この時期は、「府内古図」によると、井戸の場所は「御内町」にあたる。井戸は第2南北街路に面した位置と言える。

また、SE453の北側に隣接して、調査開始次に桜ヶ丘雨水幹線部分を調査した際、東端で大型の掘り込みを確認し、すでにSK020として報告した井戸がある。狭い範囲の調査区であったため、十分な掘り下げも行えず、全体を確認することができず、工事に着工した。この井戸も16世紀後葉であり、しかし、この部分にも、井戸があったことはほぼ間違いはない。しかし、SK020とSE453との間隔は狭く、同時に存在した可能性は低い。



第195図 SE310・453出土遺物実測図 (1/3) 9(1/1)

(5) 柱穴状遺構

調査区からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されている。直ぐに建物に結びつくものは無いが、様々な理由から掘られたものである。ここでは、柱穴状遺構から出土した遺物を中心に報告を行なう。出土遺物は第199図と第200図に図示した。

SP209 K40の東側壁沿いで検出されたSK255内に掘り込まれた遺構である。出土遺物は第199図1に図示した口径12.2cmの京都系土師器が出土しており、16世紀後葉である。

SP226 この遺構はSK226で3点の在来系土師器の皿とともに報告している。ここではそれに追加して第199図2の口径13.4cmの在来系土師器の坏を報告する。SK220・SK253と接合する。

「二石」 SP227 K40の万寿寺境内で検出された遺構である。遺構内から第199図4に図示した「二石」とヘラ描きされた備前焼の大甕の肩部が出土している。16世紀後葉と考える。

柱穴内礎石 SP266 第196図に図示したSP266はI40の第2南北街路下で検出した。遺構内の下位に河原石が据えられており、柱穴内礎石と考える。出土遺物は第199図3に図示した14世紀代と考える在来系土師器が出土している。

コビキ痕 SP271 遺構はJ40の北隅、万寿寺内で検出された。出土遺物は、第199図5に図示した埴が出土している。一部を欠くがほぼ完全な形をしている。片面にコビキ痕がある。

赤間石の硯 SP325 遺構はK31のSD363の上面で検出された。出土遺物は第200図1に図示した景德鎮窯系の青花皿と2の赤間石の硯が出土している。御内町に関連する遺構である。

SP329 SP329はI31のSD060の上面で検出された。出土遺物は第200図3に図示した口径11.2cmの京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。

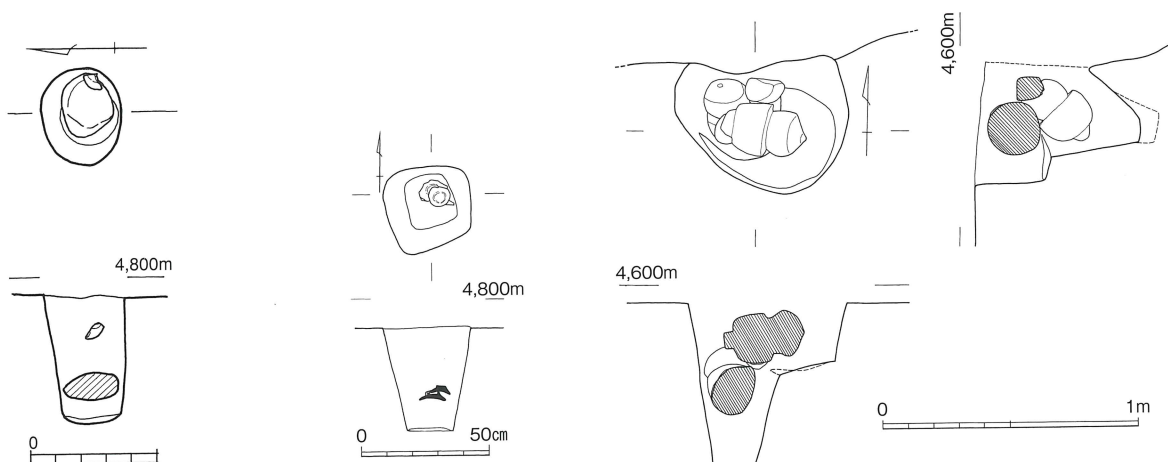
SP375 第197図に図示したSP375はJ33の第2南北街路下で検出された。出土遺物は第200図4の龍泉窯系の青磁碗、京都系土師器の口径9.2cmの皿、口径12.8cmの坏が出土している。

土錘 SP377 SP377はJ32の第2南北街路下で検出した。出土遺物は第200図7～10に図示した紡錘形の土錘が出土している。重さは完形品の8が4.1g、9が8.5gdである。

SP385 SP385はJ33の第2南北街路下で検出された。出土遺物は第200図11に図示した口径12.7cmの京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。

SP393 SP393はJ34のSD363の上面で検出された。遺構内には焼土が含まれ、天正14年（1586）の島津氏侵攻以降と考える。出土遺物は、第200図12の灯明皿として再利用された、口径9.8cmの京都系土師器が出土している。

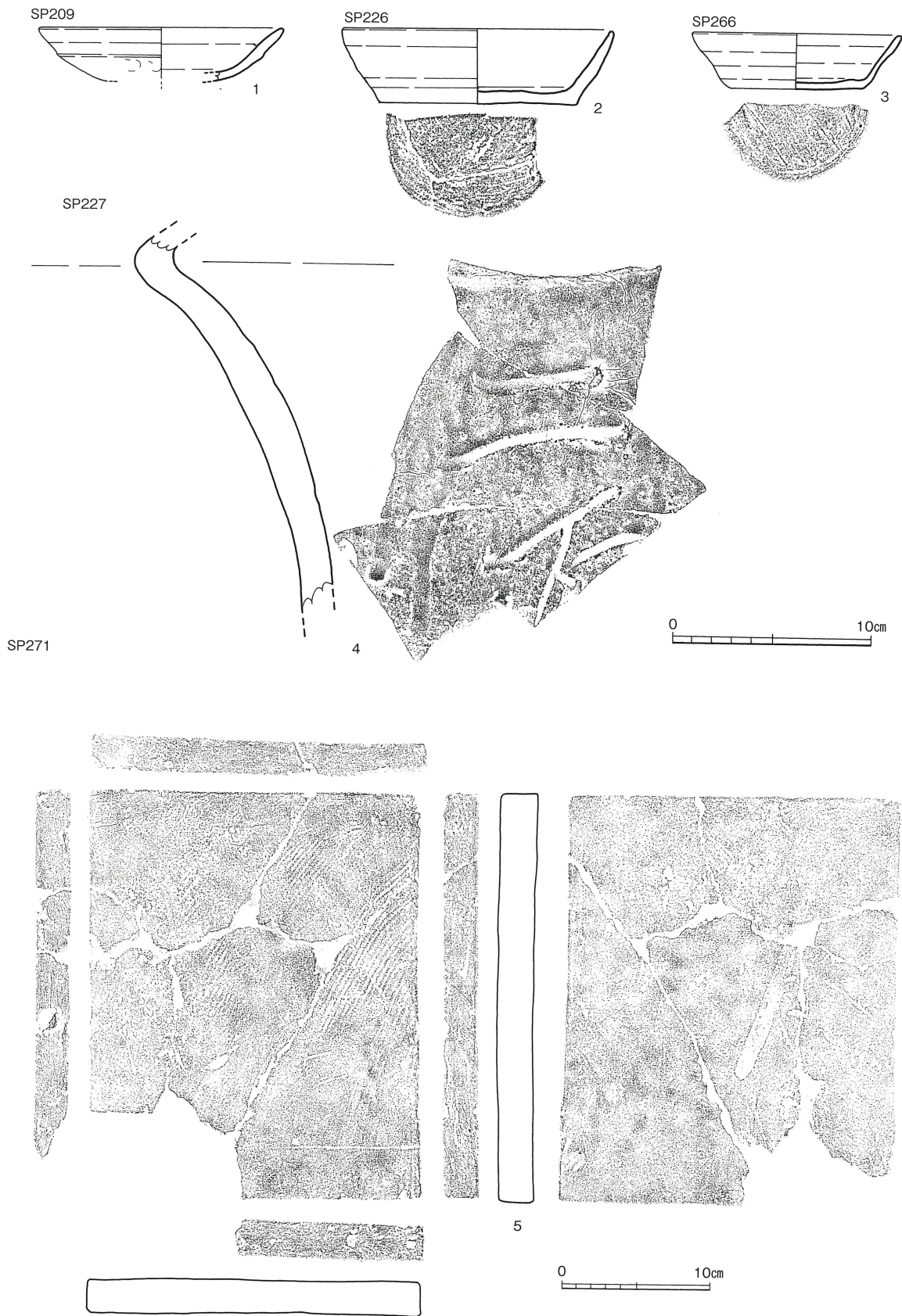
SP394 SP394はSP393の東側で検出され、遺構内に焼土を含む。周辺の同様な柱穴状遺構を見る



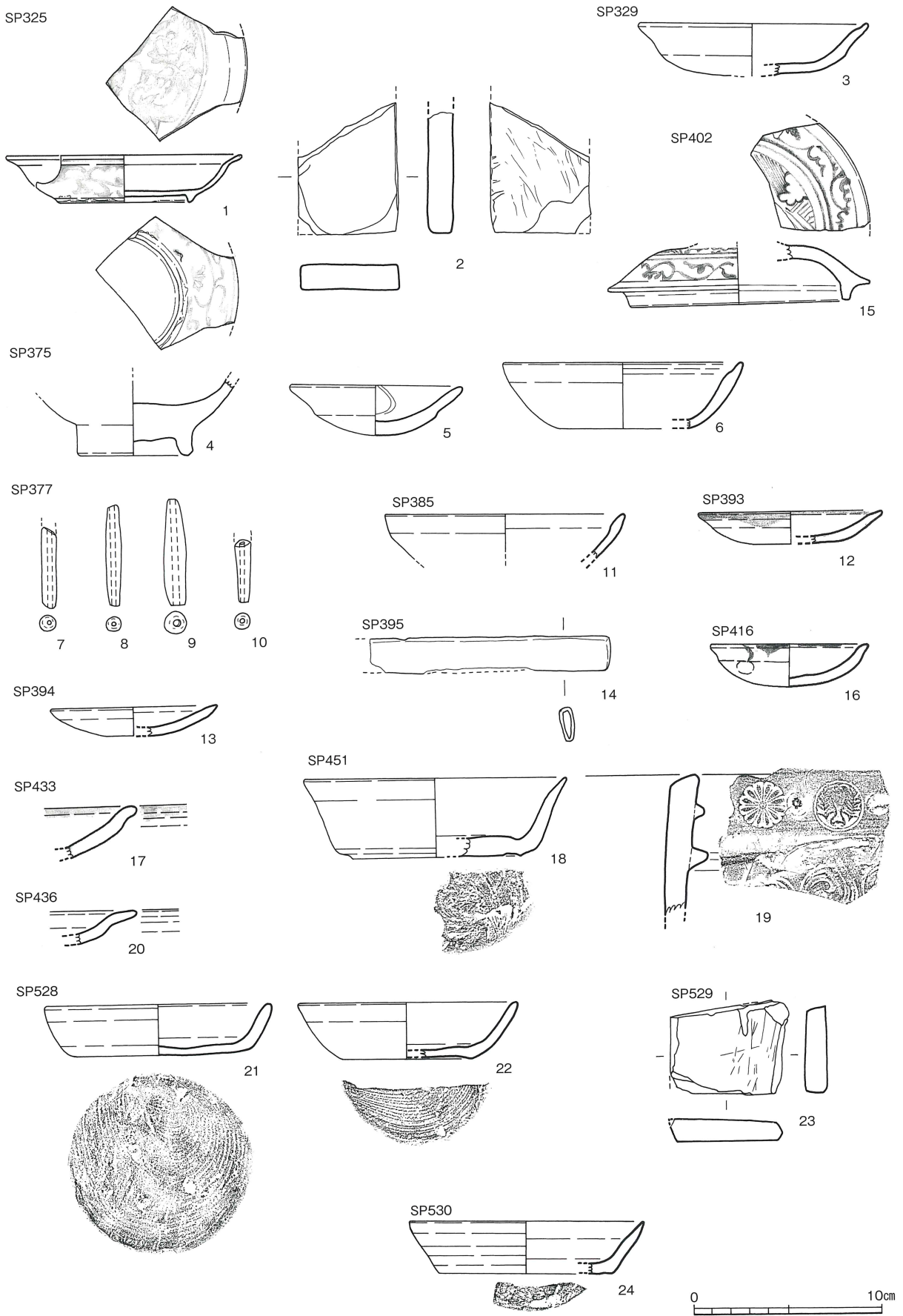
第196図 SP266 実測図 (1/30)

第197図 SP375 実測図 (1/30)

第198図 SP556 実測図 (1/20)



第199図 柱穴遺構出土遺物実測図(1/3) 5(1/4)



第200図 柱穴遺構出土遺物(1/3) 14(1/2)

と、東西方向に並ぶ一連の遺構の可能性が強い。出土遺物は第200図13の口径8.8cmの京都系土師器が出土しており、同じ時期と考える。

金銅製の小柄 SP395 SP395はJ35の包含層上面で検出された。出土遺物は第200図14の金銅製の小柄が出土しているが、近世の層に混入していると考ええる。

漳州窯系 SP402 SP402はJ33の第2南北街路上面で検出された。遺構内には焼土が含まれる。出土遺物は第200図15に図示した漳州窯系の青花の蓋が出土している。

SP416 SP416はJ36のSD363の上面で検出され、遺構内に焼土を含む。出土遺物は第200図に図示した口径8.4cmの京都系土師器が出土している。灯明皿としても利用されている。

SP433 SP433はSD363のJ33の上面で検出された。遺構内からは、第200図17に図示した京都系土師器の破片が出土している。

SP436 SP436はSD363のK33の上面で検出された。SP433の東に隣接する。遺構内からは、第200図20に図示した京都系土師器の破片が出土している。

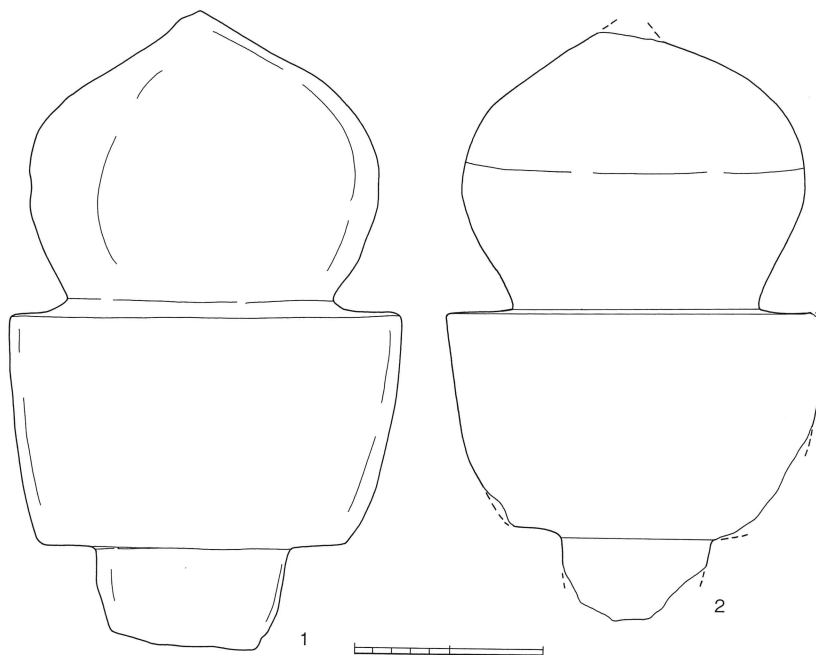
菊花文と巴文 SX451 SX451は付図4-5に図示したSD363内の集石で、柱穴状遺構とは異なる。遺物は第200図18の在地区土師器と19の外面に菊花文と巴文の押捺文のある瓦質土器の火鉢が出土している。14世紀代である。

SP528 SP528はI35の第2南北街路下で検出された遺構である。出土遺物は第200図21・22の在地区土師器が出土している。14世紀代の遺構である。

SP529 SP529はI35の第2南北街路下で検出された遺構である。出土遺物は第200図23の天草石の砥石が出土している。

SP530 SP530はJ35の第2南北街路下で検出された遺構である。出土遺物は第200図24の在地区土師器の坏の小破片が出土している。

空風輪 SP556 第198図に図示したSP556はI38で検出された。北側をSK533に切られる。遺構内からは第201図に図示した阿蘇凝灰岩製の石塔の部材である空風輪が2点出土している。出土状況は埋納された状態である。



第201図 SP556出土遺物実測図(1/4)

(6) 集石

府内町跡第51次調査南部地区では、各所で集石を検出した。その意図は街路の整備や廃棄などが考えられる。その形状も、散乱状態や積み上げられた状態などが認められる。遺物はこうした石群の間に挟まって出土したもので、一緒に廃棄された状態と言える。以下、個別の集石についての報告を行なう。

SX204 第202図に図示したSX204は、J40で検出された集石である。位置は万寿寺の堀を埋め立てた後の上面にあたる。約1mの範囲に人頭大から拳大の石を集めており、断面を見ると上面は平坦であるが、中央部が窪んでおり、浅い穴を埋め立てた状況である。

博

出土遺物は第204図1に図示した漳州窯系の青花皿と、第205図に12に示した幅22.8cmの博が出土している。京都系土師器の小破片も多数出土している。時期は、16世紀後葉と考える。

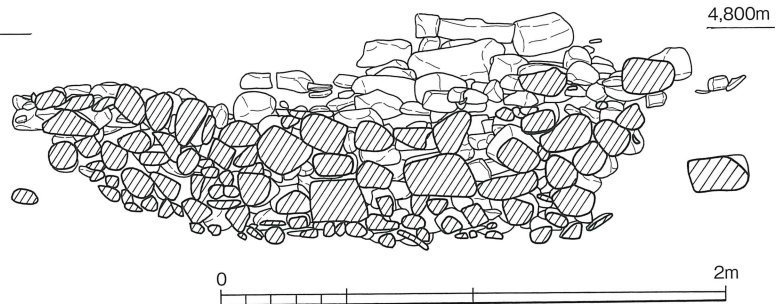
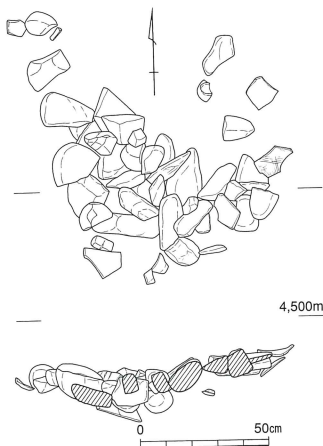
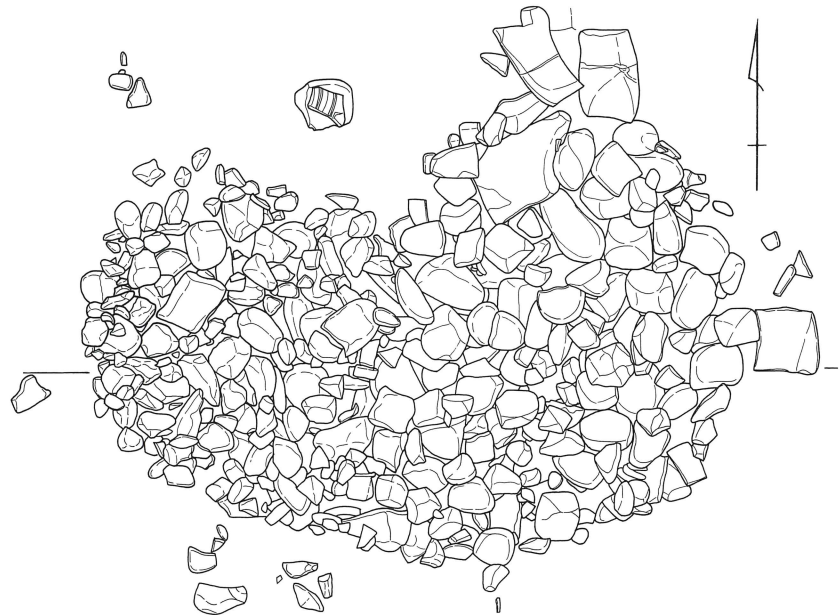
SX206 第203図に図示したSX206はJ40で検出された集石で、埋め立てられた万寿寺の堀の上面に当たる。遺構の規模は、上面が南北約1.5m、東西約2mの範囲で検出され、掘り込みの形状は確認できなかったが、断面を見ると深さ約70センチである。

遺物は集石と一緒に埋め込まれた状態で、大型の破片や挽白などの石製品が多量に出土した。代表的な遺物は、第204図2～11と第205図13・14、第206図15～18、第207図19・20に図示した。2

は景德鎮窯系の青花の小坏である。3は中国産の白磁の皿である。4はタイ産の四耳壺の口縁部である。5は中国産の褐釉陶器の瓶である。6は備前焼の小型の鶴首徳利である。外面

タイ産四耳壺

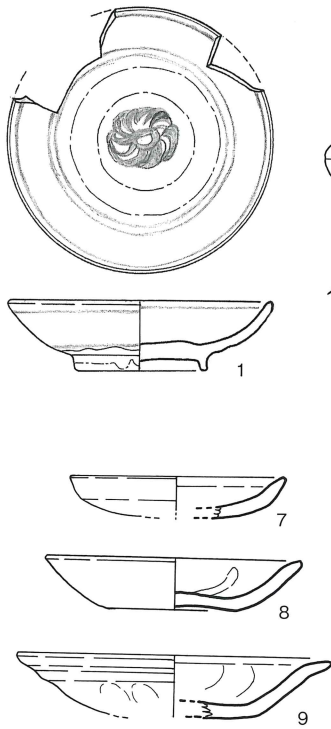
褐釉陶器



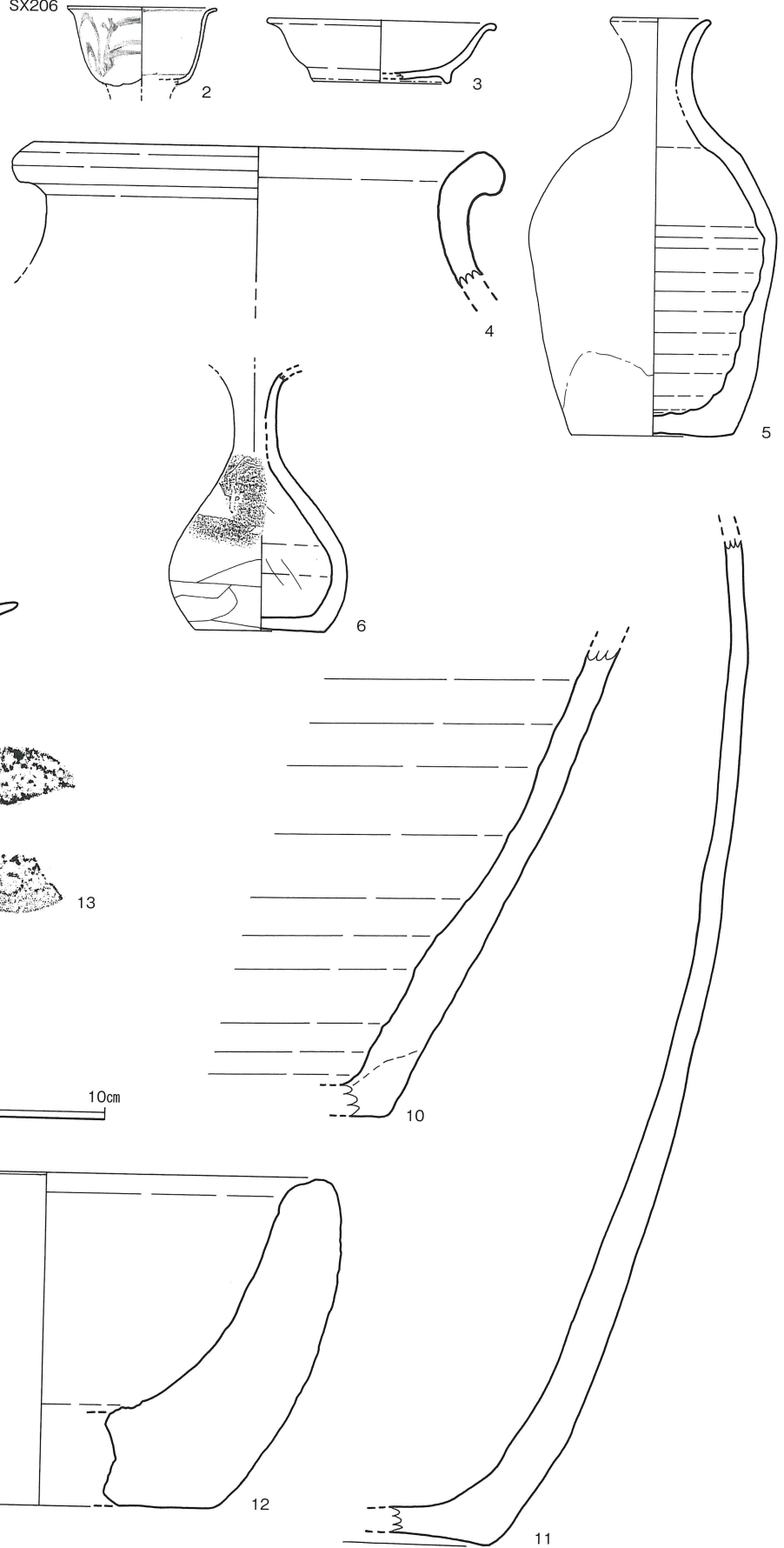
第202図 SX204 実測図 (1/30)

第203図 SX206 実測図 (1/30)

SX204

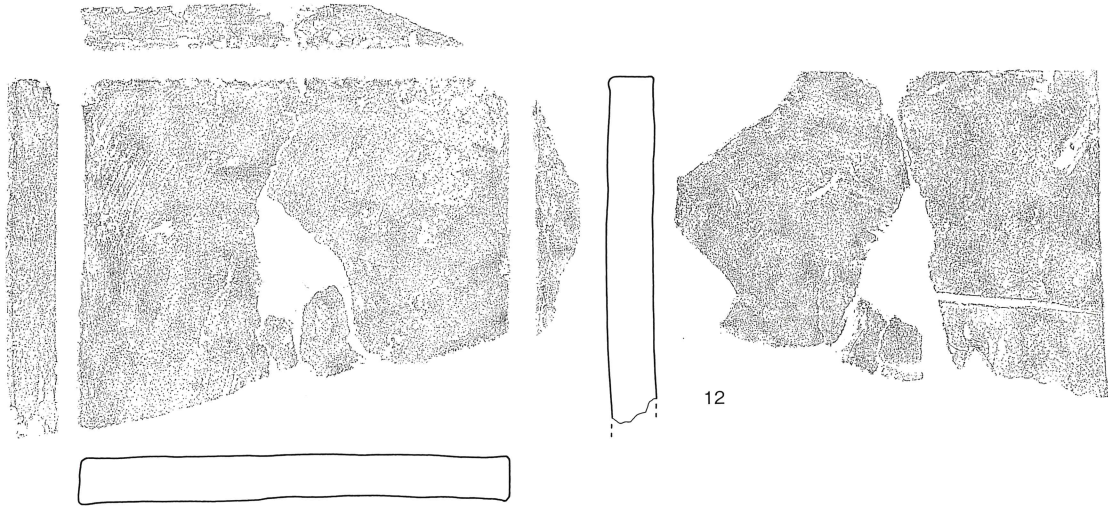


SX206

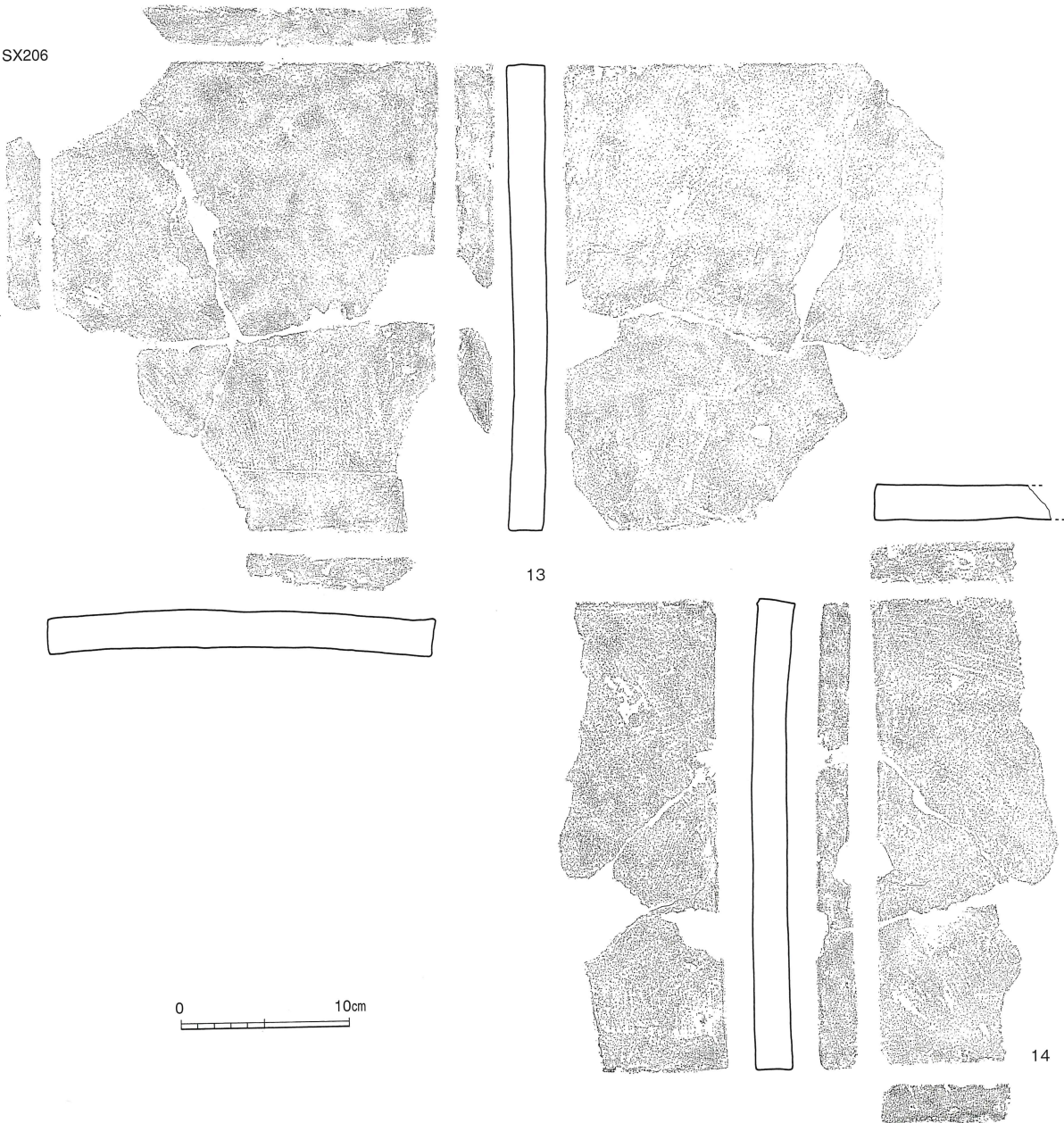


第204図 204・206出土遺物実測図 (1/3) 13(1/1)

SX204



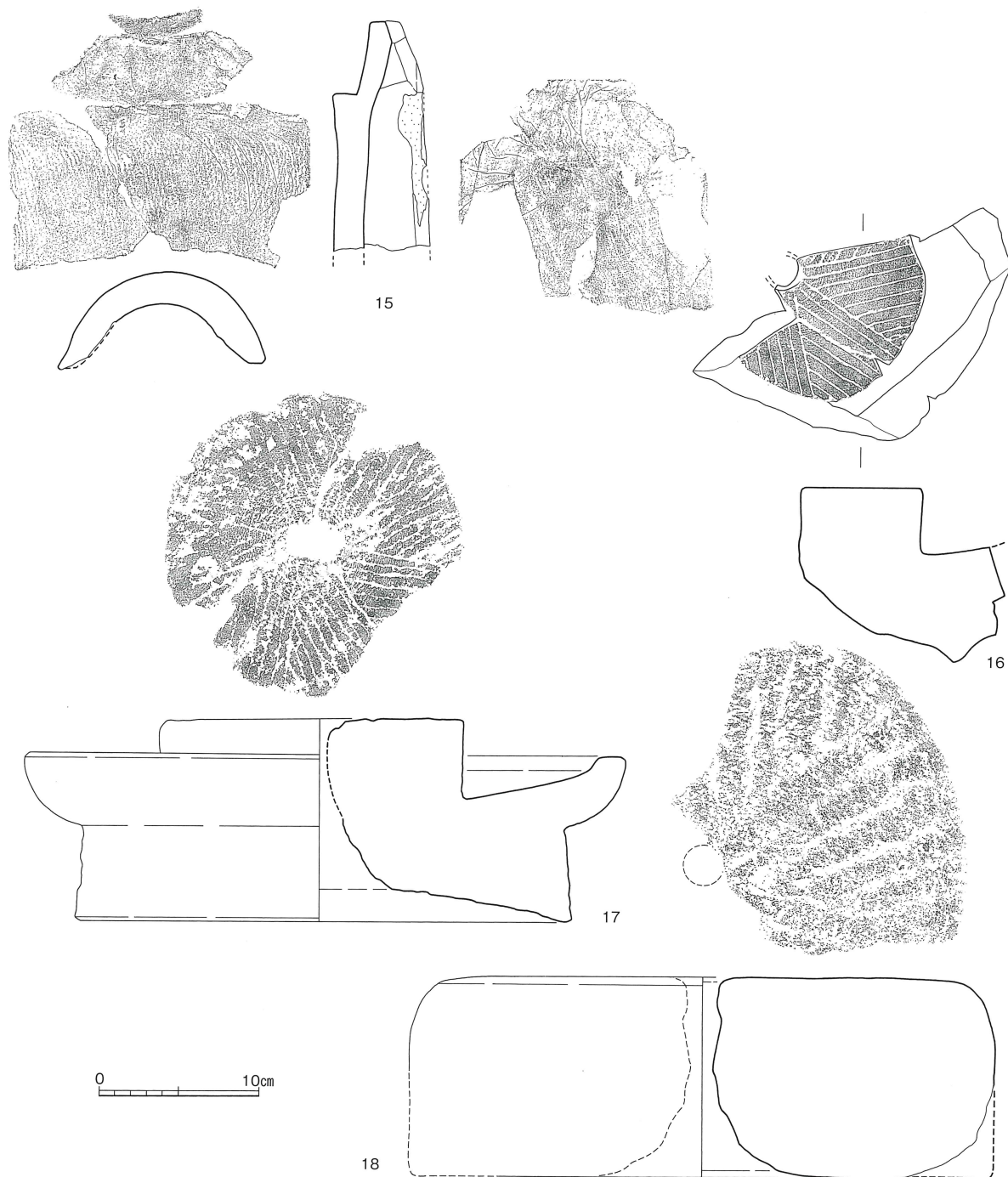
SX206



第205図 SX204・206 出土遺物実測図 (1/4)

にヘラによる記号がある。7～9は京都系土師器で、口径は8cm台・10cm台・12cm台の三法量を見る
備前焼の大甕 ことができる。10・11は備前焼の大甕である。12は復元口径25.5cmの阿蘇凝灰岩を削り貫いた、石
和泉砂岩 製の容器である。手水鉢であるか。第205図13・14は磚であるが、大きさは、13が27.5cm、幅23.1cm
で、14は長さ28cmで、SX204出土と合わせても、規格品と言える。第206図15は玉縁のある丸瓦で、
外面は縄目叩きで調整している。16は挽白の下白で、茶臼と考えられ、和泉砂岩の可能性はある。
17も挽白の下白で、茶臼であるが、安山岩製である。18と第207図20は大型の挽白の下白であるが、
19は上白である。以上の3点は安山岩製である。

SX206から出土した遺物は、周辺の焼土層から出土したものと、接合する。天正14年（1586）の



第206図 SX206出土遺物実測図（1/4）

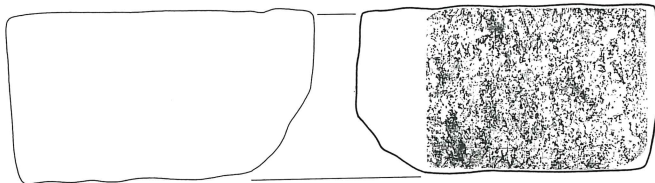
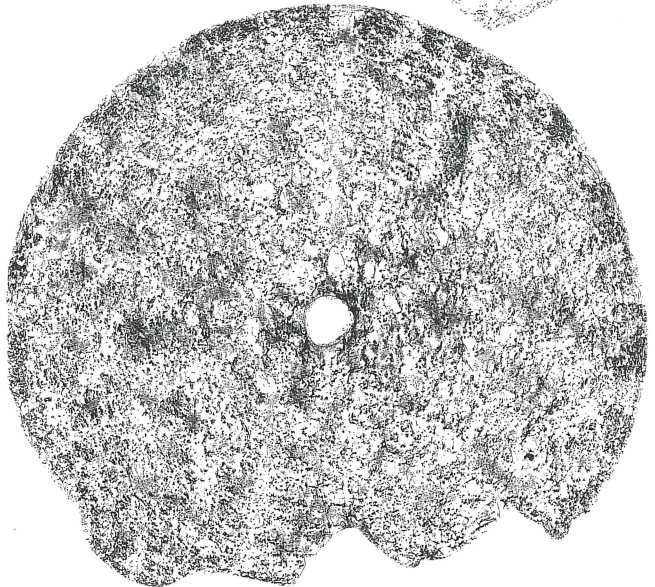
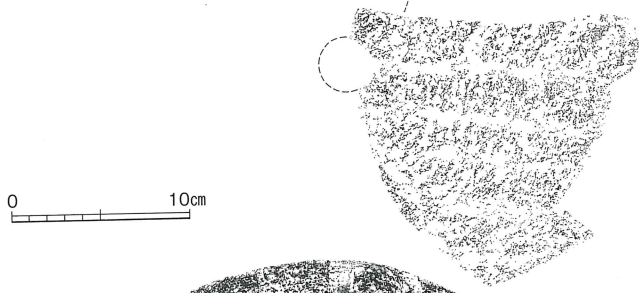
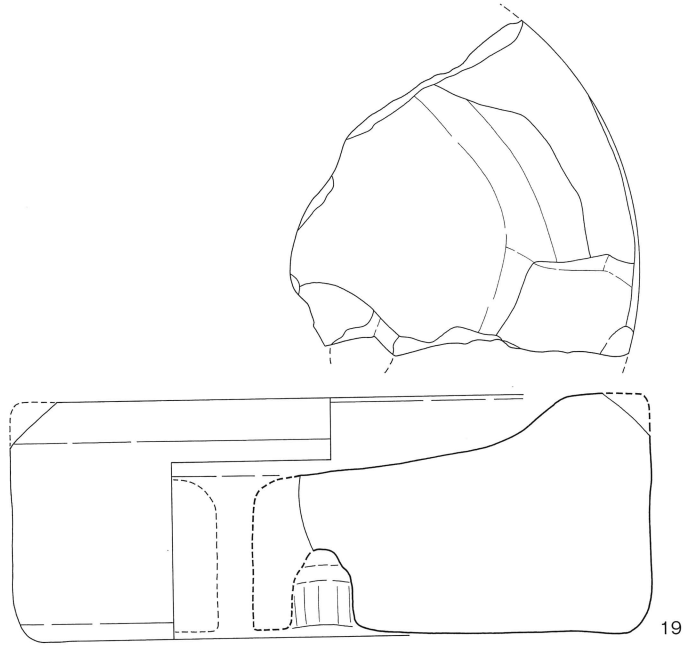
町屋整備

鳥津氏の侵攻後の町屋整備の際に、穴を掘って埋めた痕跡と理解し、16世紀末葉と考える。

万寿寺の堀

SX230 第212図に図示したSX230はJ40で検出された集石である。南北約1.2m、東西約0.6mの範囲に集中する。位置の特徴は、万寿寺の堀を埋めた土砂を発掘中に東側の壁沿いで検出され、埋め立て作業の中で、石を集中的に廃棄した状態である。断面を見ても、集石は堀中央部に向かって斜めに傾斜している。

遺物は第219図1に図示した口径8.2cmで、器面に布目のある京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。



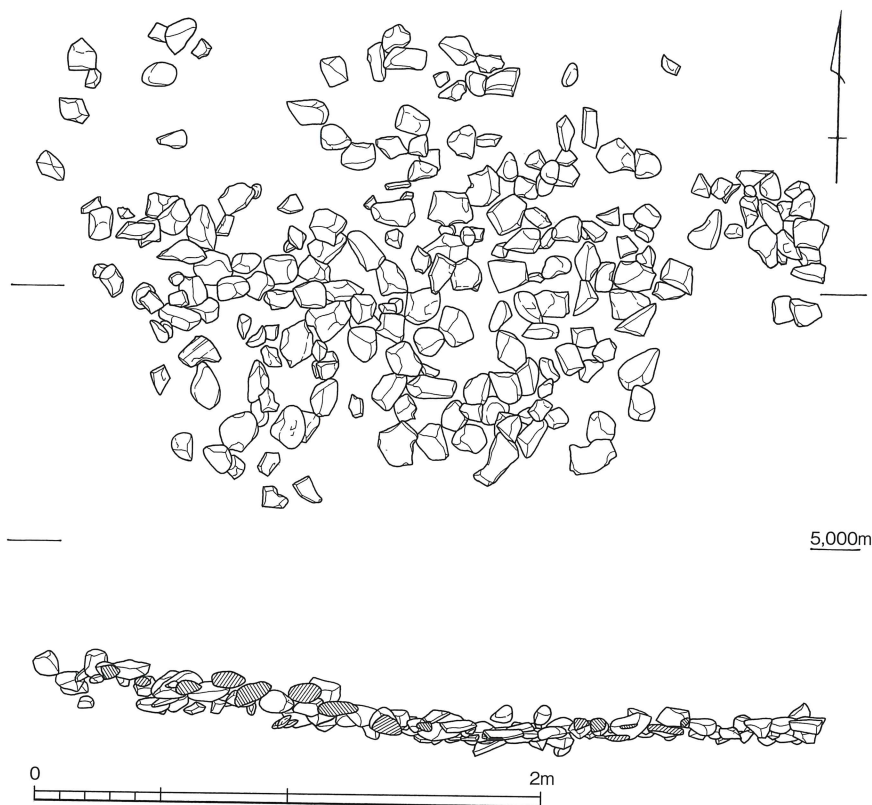
第207図 SX206出土遺物実測図(1/4)

SX277 第208図に図示したSX277は、J39の北側で検出された集石で、万寿寺の堀であるSD200を埋め立てた上面に広がる。その範囲は、南北約2m、東西約3mで、図示したように、厚みはなく平坦で、敷き詰めた状態である。

遺物は、第211図1に図示した、口径11cmの京都系土師器と、2の特殊な部位の瓦が出土しており、時期は16世紀後葉である。

本州タイプの
吊紐

SX311 SX311はI31で検出された集石で、第2南北街路下で、溝であるSD060を埋め立てた上面にあたる。範囲は直径約1mの範囲に広がり厚みはない。出土遺物は第209図3に図示した丸瓦が、石に混じって出土した。内面に本州タイプの吊り紐の痕跡が残っている。この他京都系土師器や瓦質



第208図 SX277実測図(1/30)

土器の小破片が出土している。

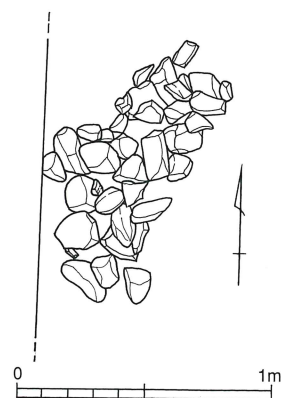
集石の時期は、出土した遺物や、検出状況から16世紀後葉と考える。

SX320 第209図に図示したSX320はI32で検出された集石で、埋め立てられたSD060の上面にあたる。集石の規模は、長さ約1m、東西約0.5mの範囲で東北方向に延びる。断面図は図示していないが、厚みはないが、浅い土坑に詰められた状況である。

出土遺物は、集石に混じり第211図4の銅銭が出土している。銭貨名は1094年初鑄の「紹聖元寶」である。

銅銭

遺構の時期は、銅銭しか出土していないが、遺構の検出状況から16世紀後葉と考える。

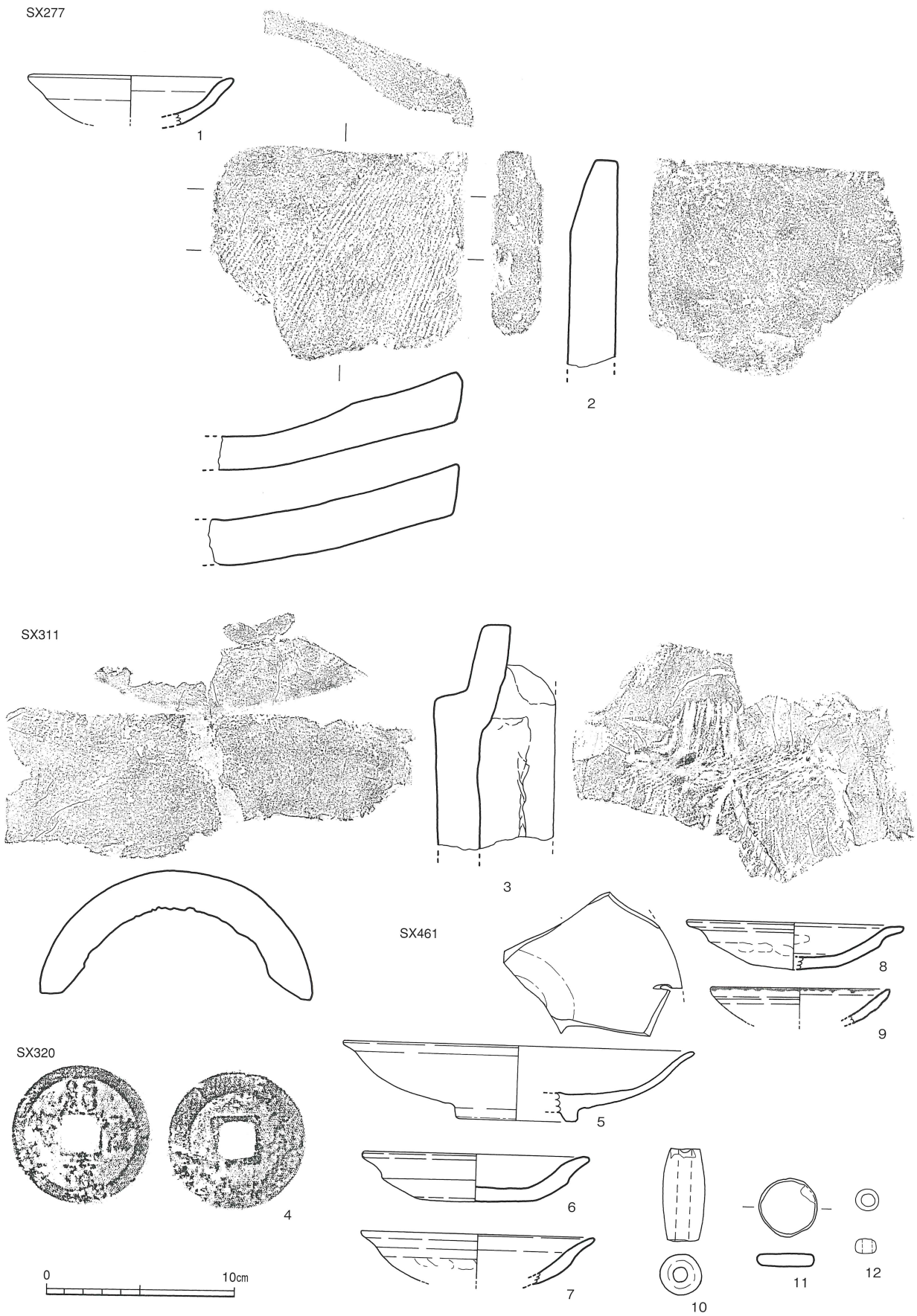


第209図 SX320実測図(1/30)

SX408 第213図に図示したSX408はJ33で検出された小規模な



第210図 SX461実測図 (1/40)



第211図 SX277・311・320・461出土遺物実測図 (1/3) 4・12 (1/1)

集石である。第2南北街路を調査中に検出されたもので、集石の規模は南北約1.4m、東西約0.9mである。集石の配置は、人頭大の石を中心に、周辺に拳大の石を並べた状態である。断面を見ると、下面が水平である。

街路整備中

出土遺物は、第219図2に図示した京都系土師器が集石の間から出土しているが、街路の堆積土中であり、どちらに所属するかは不明である。しかし、街路の整備中であることは同じであり、16世紀後葉と考える。

SX421 第214図に図示したSX421はJ35で検出された集石で、SD363を埋め立てた上面にあたる。集石の規模は直径約0.5mの範囲で広がる小規模なもので、下面は水平ではなく、乱れている。整地する際、窪みに埋め立てたと考える。

出土遺物は第219図に図示した復元口径14.8cmの京都系土師器が、集石の間から出土している。集石の時期は、検出状況や、出土遺物から16世紀後葉と考える。

SX440 第215図に図示したSX440は、J37で検出された集石である。SD363と万寿寺の堀であるSD200の間に位置し、「府内古図」に描かれる、万寿寺と堀之口町の間にある東西街路下にあたる。また、集石の下面には15世紀の白色系土師器が出土した断面V字になる溝SD446がある。

堀之口町

集石は、北側が南北約1m、東西約1.4mに集中する部分と南側の広い範囲に散乱する部分で構成されている。断面を見ると、集中部分は上面も下面もほぼ平坦であるが、南側は約40cmの落差で水平に窪んでいる。窪んだこの部分は、下部が万寿寺の堀を埋め立てた場所にあたり、地盤沈下したものと、理解できる。

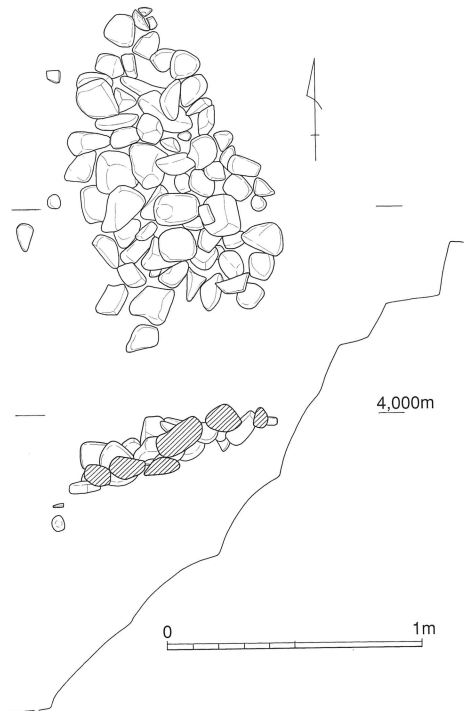
出土遺物は、第219図4に図示した口径8.2cmで、口縁部が直立する備前焼の壺や、5の復元径23.2cm、厚さ8cmの挽臼が出土している。安山岩製で上臼である。その他、集石の間や周辺から京都系土師器の小破片が出土している。

集石の時期は、京都系土師器が出土することや、検出状況から16世紀後葉と考えられる。東西方向の街路を整備する最初の段階に敷設した可能性を考える。

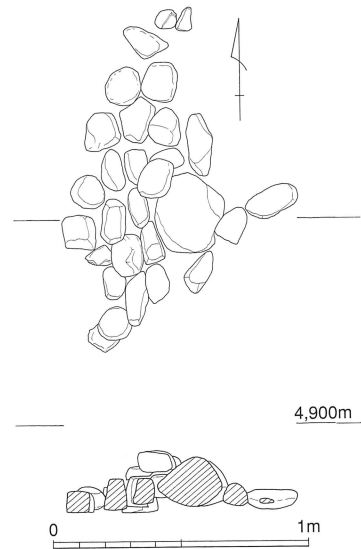
SX441 第216図に図示したは、J37の第2南北街路下で検出された集石である。検出状況は、細長く東北方向から南西方向に延びる。集石の範囲は、長さ約5.5m、最大幅約1.5mで、断面は図示していないが、厚みはなく、平坦に広がる。使用されている石材は拳大から掌大の川原石が目立つ。

鶴首徳利

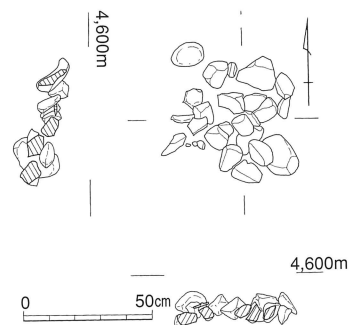
集石内や周辺からの出土遺物は第219図6～10に図示した。6は中国製の褐釉陶器の口縁部である。2は備前焼の鶴首徳利の口縁部である。8は瀬戸美濃の折縁皿である。9は京都系土師器の口縁部である。10は軟質の安山岩をレンガ状に加工した石製品である。



第212図 SX230 実測図(1/30)



第213図 SX408 実測図(1/30)



第214図 SX421 実測図(1/30)

る。遺構の時期は検出状況や周辺からの出土遺物で、16世紀後葉と言える。

万寿寺
北側街路

SX441が検出された場所は、第2南北街路と万寿寺北側街路の交差点にあたる。しかも、第2南北街路は、大友館前は最大時に幅約11mあったが、この交差点から南にかけて、万寿寺の西側の堀が埋め立てられ屋敷地化するため、幅が狭くなる。集石はこの狭くなる方向へと延びている。第2南北街路を16世紀後葉に整備する際に、下部に大型土坑であるSK533を埋めた場所など路盤が軟弱な部分があるため、それを補強する目的で敷設されたと考える。

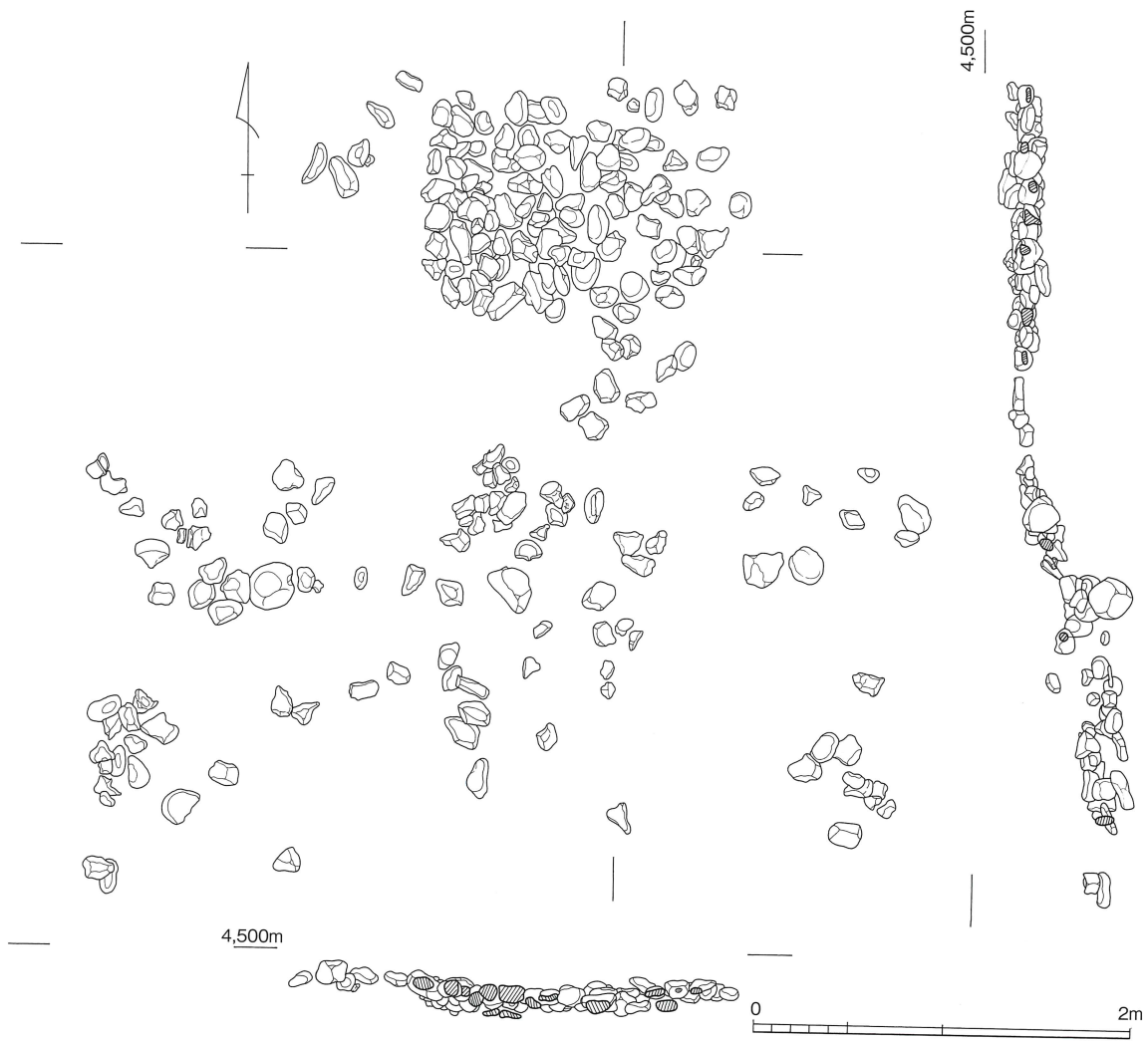
SX442 第217図に図示したSX442はJ38の万寿寺の堀であるSD200を掘り下げ中に検出された集石である。位置は西側の壁付近で、南北約2m、東西約1.5mの範囲に散漫に分布する。埋め立てを行なう際に、廃棄されたためか、堀の中央に向かい緩く傾斜している。

阿蘇凝灰岩
備前焼の大甕

第219図14の挽臼の上臼は、集石を構成していた石のひとつである。硬質の阿蘇凝灰岩製の茶臼と考える。この他、集石と一緒に備前焼の大甕の破片が出土している。

集石の時期は、検出状況から16世紀後葉である。

SX461 第210図に図示したSX461は、J37の万寿寺北側の南北街路下で検出された集石で、SX442の南側にあたる。集石の規模は南北約4m、東西約8mの広範囲で、断面を見ると厚みはなく平坦に広がる。集石は、北側に人頭大から拳大の礫が東西方向に帯状に分布しており、南側は、砂利の広がりがあり、南北約2m、東西約4mの範囲に認められる。

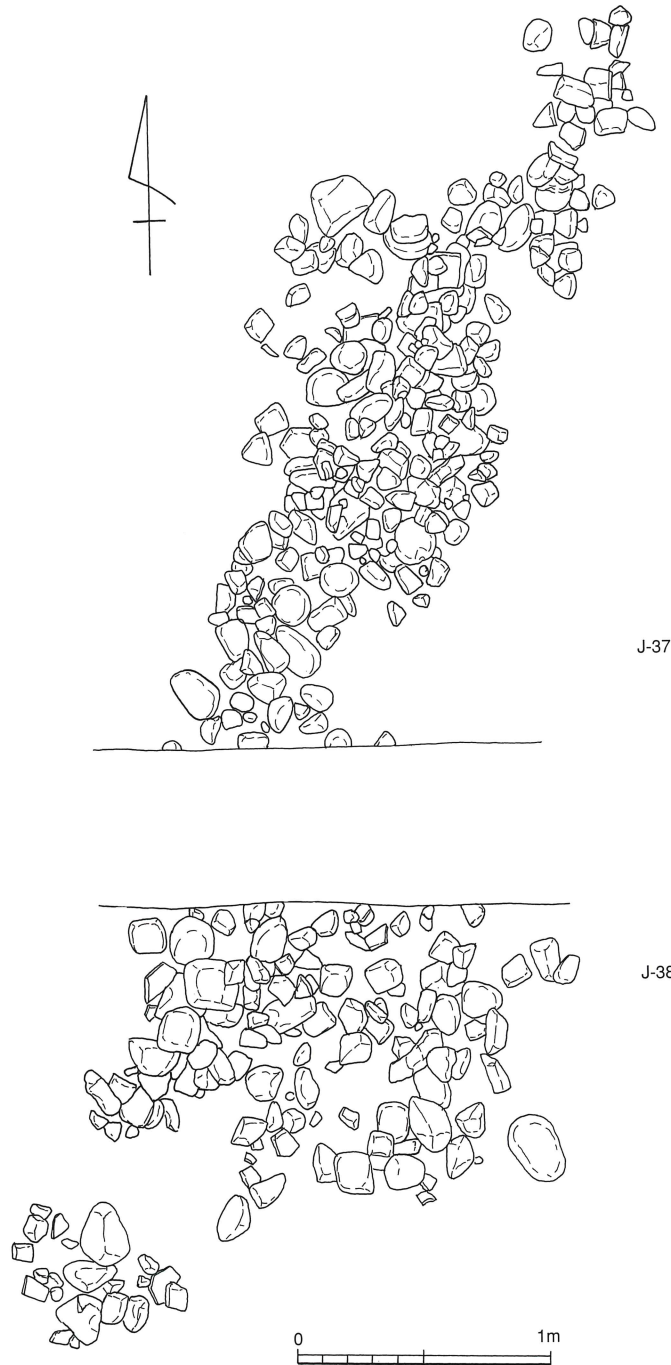


第215図 SX440実測図(1/40)

蛇目釉剥ぎ 集石内や周辺からの出土遺物は、第211図5～12に図示した。5は見込みが蛇目釉剥ぎの中国産白磁の皿である。6～9は京都系土師器であるが、口径は6～8が12cm前後で、9は9cm台である。10は紡錘形の大型の土錘で、重さは23.6gである。11は土師質土器を直径3cmの円形に加工した土製品である。側面は研磨している。12はガラス玉である。

大型土坑 SX461の時期は、出土遺物や検出状況から16世紀後葉であるが、集石は大型土坑SK533の上面に位置する。集石の状況は街路整備に係わる様相であり、特に砂利敷きは街路整備そのものと言える。SX461はSX442と同様、大型土坑を埋め立てたあと、軟弱な路盤を補強する意味合いが強い。

SX518 SX518はI37で検出された集石である。大型土坑SK533の上面に位置し、直径約1mの範



第216図 府内町跡51次調査SX441実測図(1/30)

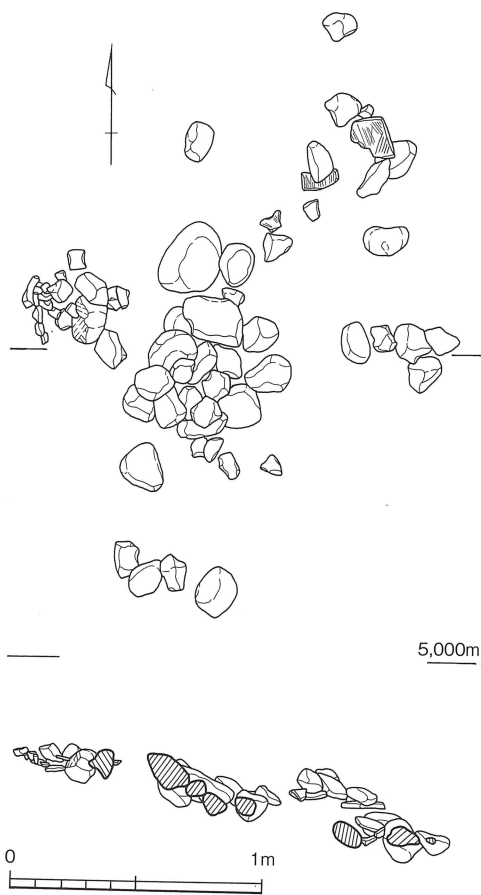
第2節 中世大友府内町跡第51次調査

雷文や菊花文 囿に礫が集中していた。これも第2南北街路を整備する際に軟弱な部分を補強したものであろうか。出土遺物は、第219図11・12に図示した。11は瓦質土器で、外面に雷文や菊花文などのスタンプ文が押捺されている。大きさと口縁部の立ち上がりから、香炉と考える。12は瓦質土器の破片の側面を研磨し、仕上げた直径3cmの円形の土製品である。

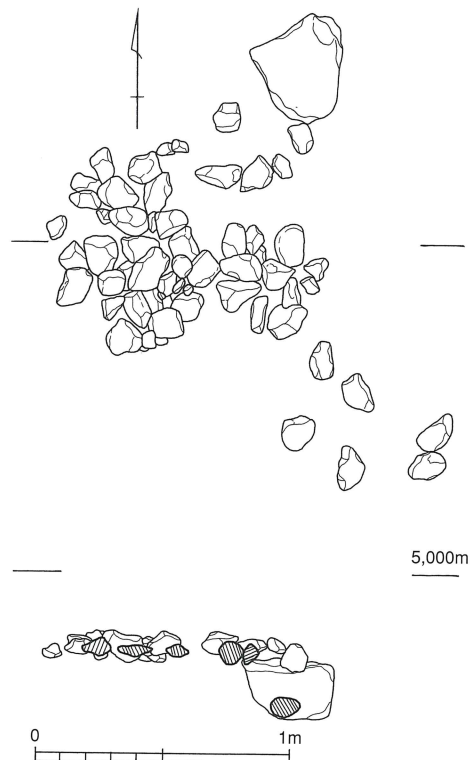
遺構の時期は、検出状況から16世紀後葉と考える。

礎石 SX534 第218図に図したSX534は、J38で検出された集石である。検出面は、万寿寺の堀であるSD200を埋立てた上面にあたる。集石は南北約1.5m、東西約1.2mの範囲に分布する。集石には礎石と考えられる上面の平坦な大型の石を含み、南側に、拳大の礫が集中する。両者の関係は、礎石上面と、集石の下面が同じで、ある時期の地表面を示している。

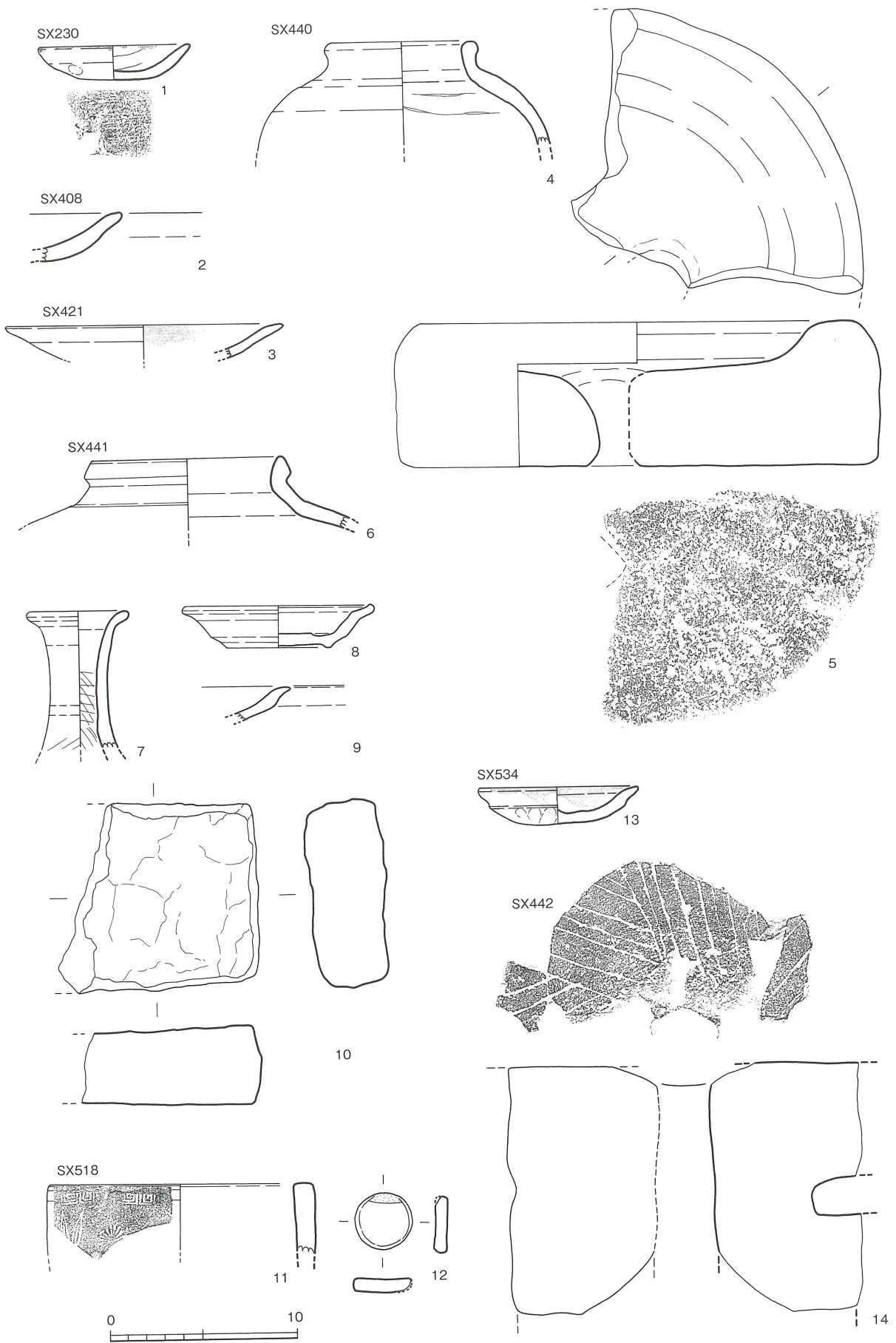
灯明皿 出土遺物は、第219図13に図示した口径9.4cmで、灯明皿として再利用された京都系土師器が出土している。集石の時期は16世紀後葉である。集石にある礎石は、万寿寺の堀を埋めて町屋を整備しているが、その建物に関連する可能性が強い。



第217図 SX442 実測図 (1/30)



第218図 SX534 実測図 (1/30)



第219図 SX230・408・421・440・441・442・518・534出土遺物実測図(1/3)

(7) 焼土

鳥津氏の
豊後府内侵攻

中世大友府内町跡では、近世の水田層を除去後、露出する中世の包含層を掘り下げると、最初の遺構面が現れる。この面の下位でしばしば焼土層が確認される。この焼土層は、前後の遺物の編年的な位置づけや、文献資料との照合で、天正14年（1586）の鳥津氏の豊後府内侵攻に起因すると考えられている。府内町跡第51次調査南部地区を発掘中にもこの焼土層が検出された。ここでは、焼土層から出土した遺物を中心に報告を行なう。

景德鎮窯系

SX202 SX202は万寿寺の堀を埋立てた上面に広がる焼土層で、J40を中心に検出された。この部分は、埋め立て地のため、中央部が窪んでおり、焼土は比較的厚く残っていた。遺物は、この焼土内から多量に出土した。第220・221・222・223・224・225・226図の1～98までがその主要な遺物である。1は獅子と草花文が描かれた景德鎮窯系の青花碗で、小野編年の染付碗E群である。2は見込みに草花文のある碁笥底の皿で、景德鎮窯系で、小野編年の染付皿C群である。3～10は青花の皿であるが、全て景德鎮窯系で、小野編年の染付皿E群である。全体に草花文で飾られるが、5の見込みには2名の人物、8・9には龍が描かれている。1・5の底部には「宣徳年造」の銘がある。

漳州窯系
白磁

11は景德鎮窯系の青花の小坏である。12は青花の合子である。13は漳州窯系青花の大振りの皿である。14は見込みに麒麟のある景德鎮窯系の輪花皿である。小野編年の染付皿F群である。15～18は口縁部周辺に横線のみがある青花である。器形は17が碗の他は皿であるが、15は小野編年の染付皿E群、16がB2群である。18は見込みが蛇目釉剥ぎである。漳州窯系と考える。19～23・25～27は白磁で、小野編年の白磁C群である。24・29は輪花皿で、29は小野編年の白磁D群である。28は見込み部が露胎の白磁である。

龍泉窯系
焼締陶器
タイ産四耳壺
瀬戸美濃産
備前焼

第222図の30～32は龍泉窯系の青磁である。30は蓋、31・32は大皿である。33は褐釉陶器の壺で、SX204と接合する。ある。34～36は口縁部が肥厚する焼締陶器の鉢である。19は口縁部が外側に広がり、上面に沈線が入る文様帯が生じている。36はタイ産の焼締陶器の四耳壺で、肩部に沈線が入る。38・39は瀬戸美濃産の天目茶碗で、38は輪高台、39は内反り高台である。

香炉
水屋甕

第223・224図には備前焼を図示した。40・53・54は備前焼の播鉢である。40は内面に斜め播目のある播鉢であるが、53・54は放射状の播り目のみで、54の注口部外面には播り目工具により、縦方向に櫛目文が入れられている。41は大型の皿である。口縁端部が突き出る。42・42は大甕であるが、完形品に復元された43は6分の1の表示である。口径は33cm、底径は27cm、器高は65cmである。肩部には縦と横に三本の線を交差させたヘラ描きの記号がある。

44は口縁部が屈曲する小型の坏で、45の底部には短い脚が付き、香炉と考える。46は片口の小壺で、片口部の反対方向に取手の痕跡が認められる。47は水屋甕で、48は壺の底部である。49～52は徳利である。51は首が細く鶴首形をしているが、他はラッキョウ形である。50の胴部には「又」字状のヘラ描きの記号が書かれている。

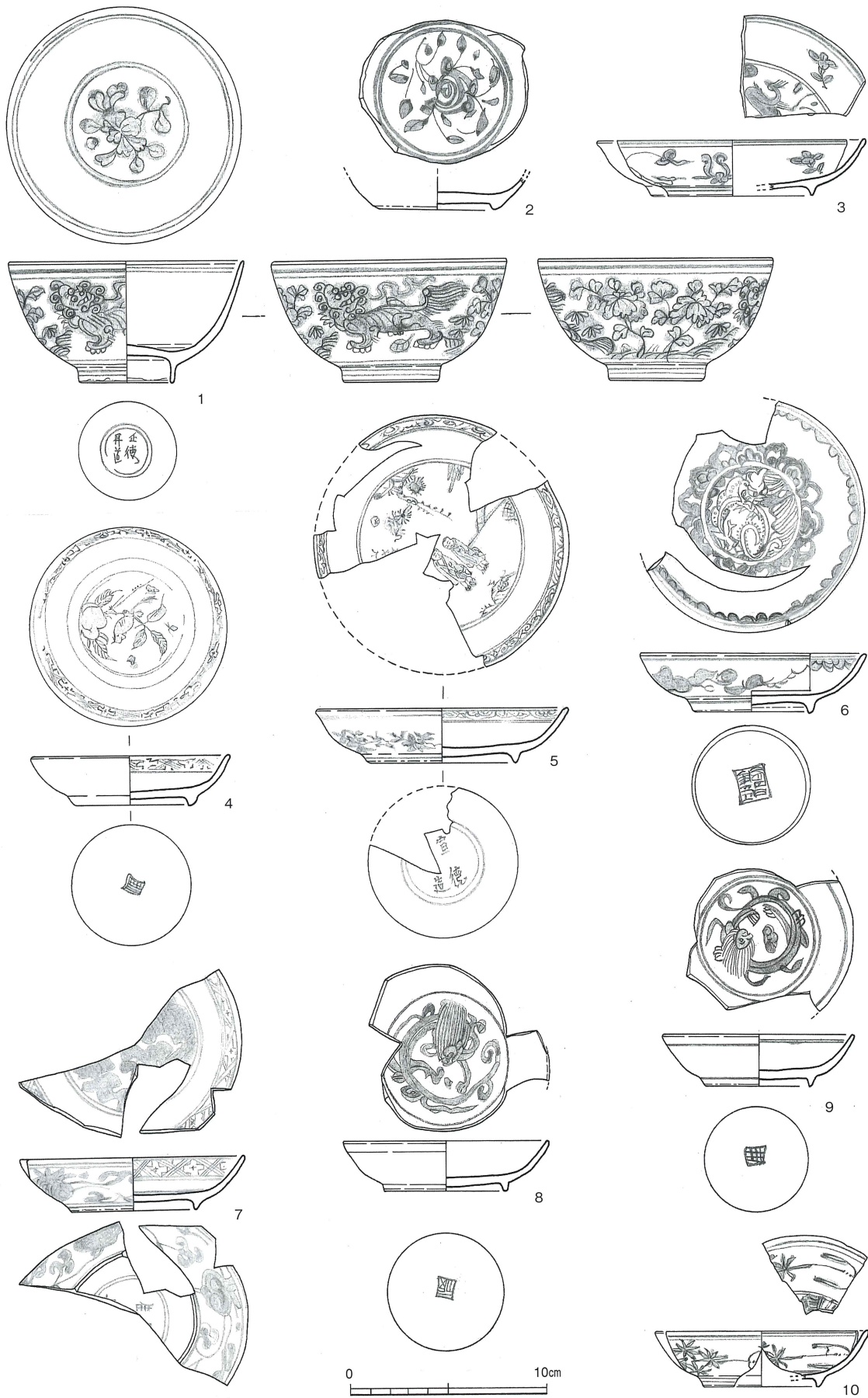
焼塩壺

第225図の55～77は京都系土師器の皿である。口径で分類すると、55～68は口径が9cm前後最小タイプである。55・56・58・63・65・66は灯明皿として再利用されている。69～77は口径12cm前後である。78は口径が11.2cmであるが、器高は3.1cmで坏形をしている。79は口径5.4cmの口縁部が直立する皿である。灯明皿として再利用している。80も同じタイプの皿であるが、次に報告する焼塩壺の蓋の可能性もある。

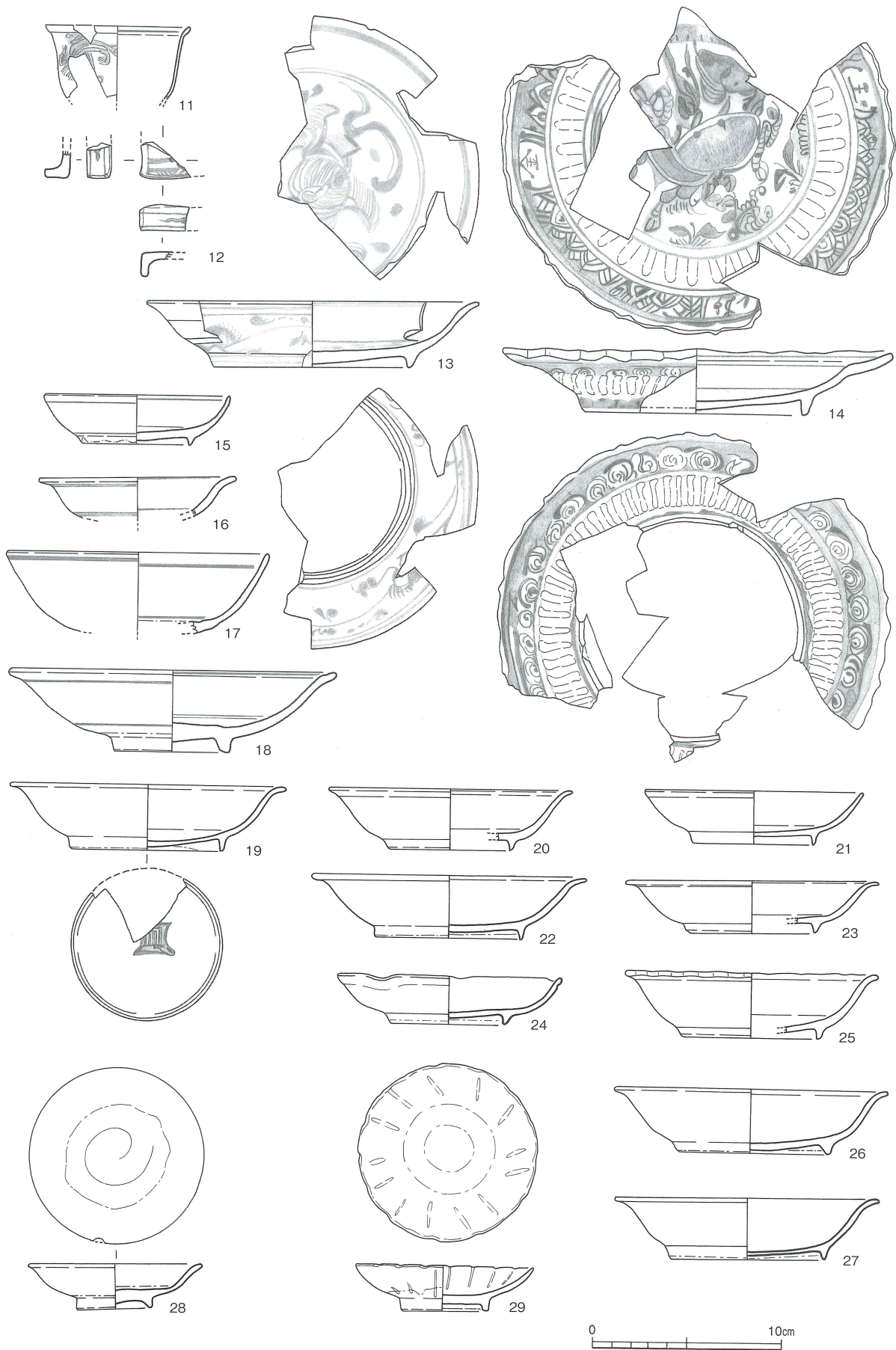
青銅製品

82・83は瓦質土器の鉢である。口径は30cmを越え、83の外面にはヘラ削り調整の跡が残る。84～86は紡錘形の土錘である。完形品の84の重量は、7.8gである。87は粘板岩製の砥石である。88の硯は赤間石製である。89は菊花文のある銅製の薄板である。90も器種不明の青銅製品である。

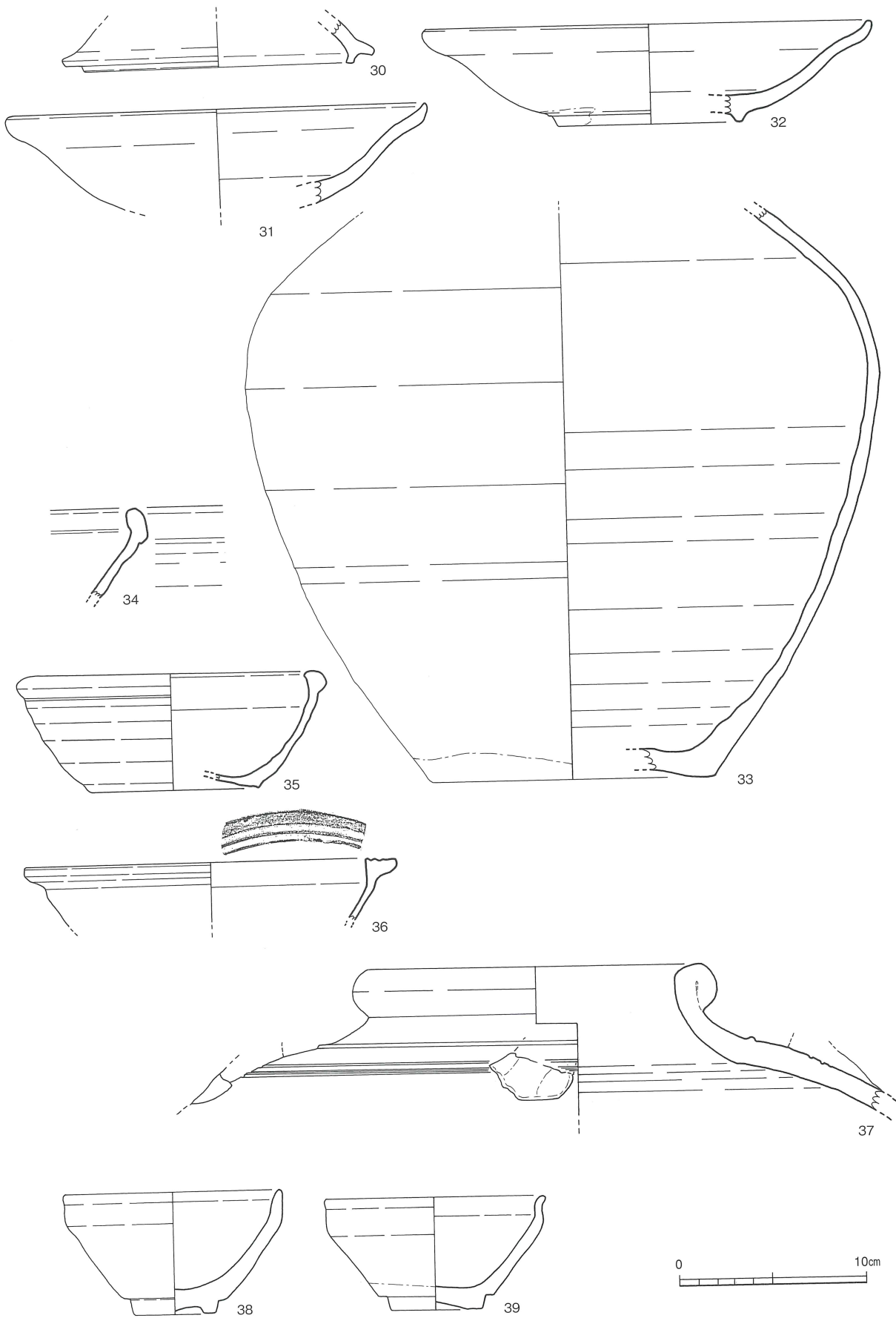
第226図91は挽き臼の下臼で、安山岩製で6分画の播り目が刻まれている。92は磚である。半分は欠けているが、長さは22.7cmで、厚さは2.5cmである。93～98は銅銭であるが、銭貨名は、93が1064



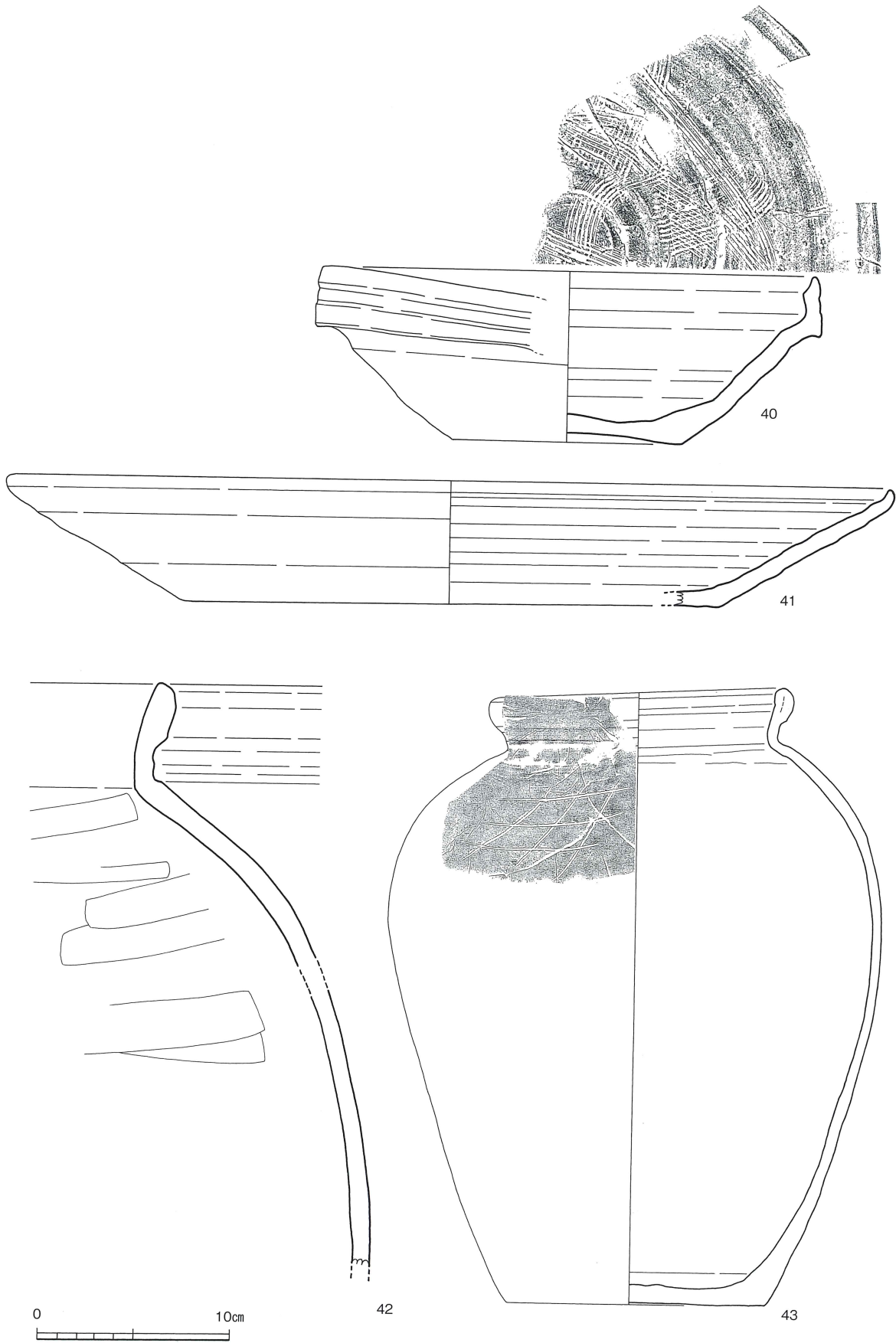
第220図 SX202出土遺物実測図① (1/3)



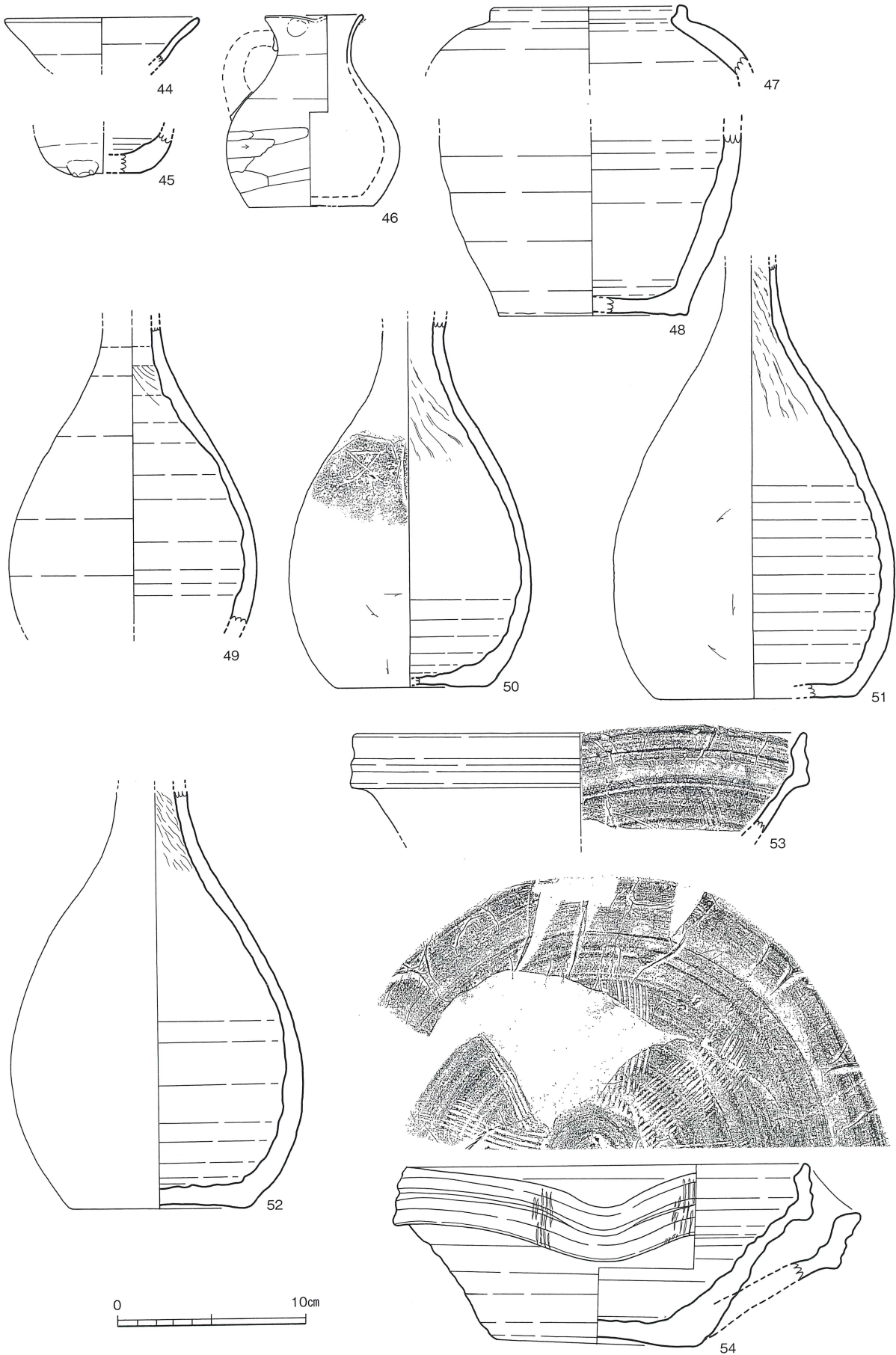
第221図 SX202出土遺物実測図② (1/3)



第222図 SX202出土遺物実測図③ (1/3)

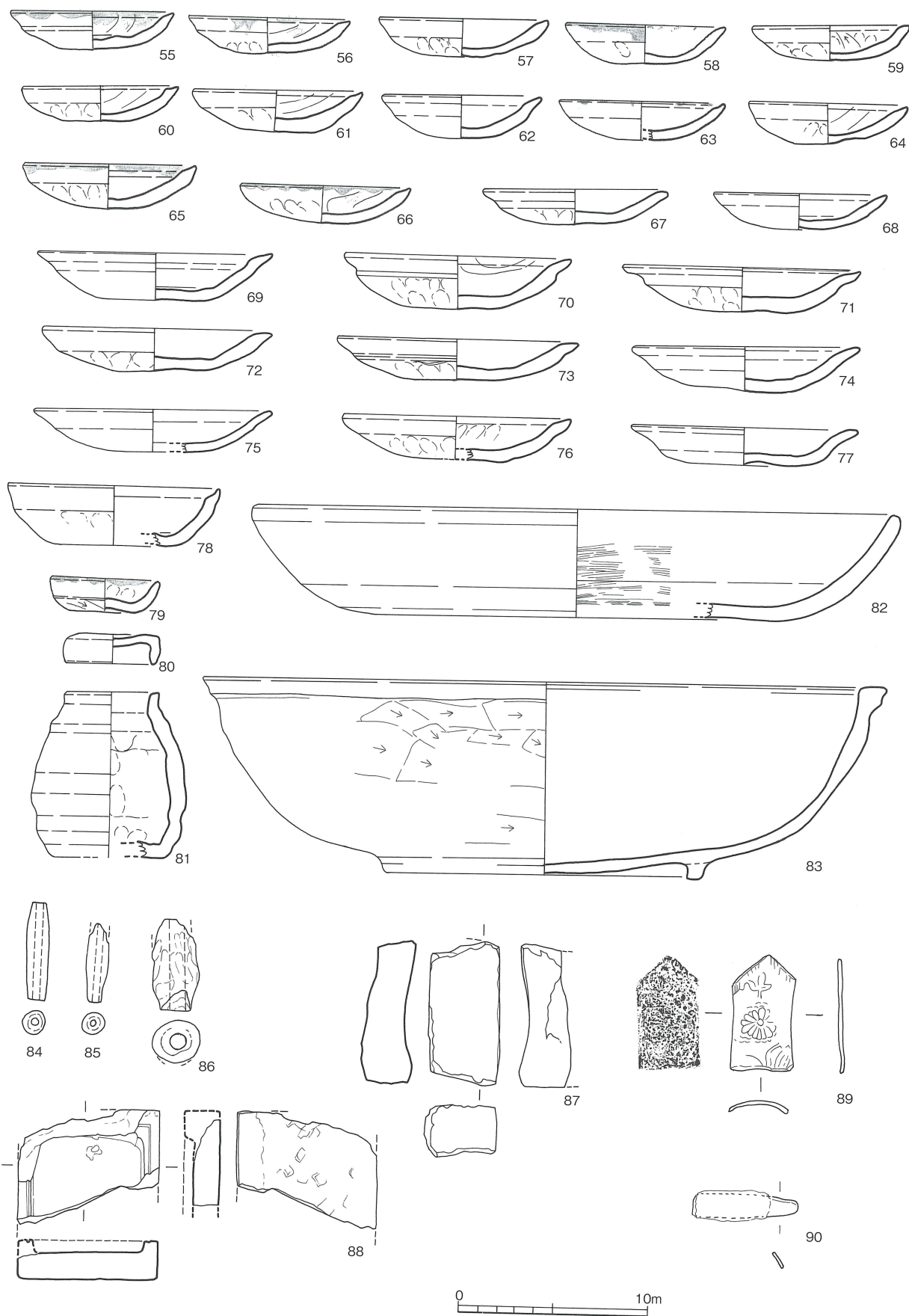


第223図 SX202出土遺物実測図④ (1/3) 43(1/6)



第224図 SX202出土遺物実測図⑤ (1/3)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査



第225図 SX202出土遺物実測図⑥ (1/3) 89・90(1/2)

年初鑄の「治平元寶」である。94は1078年初鑄の「元豊通寶」である。1086年初鑄の「元祐通寶」である。96は1111年初鑄の「政和通寶」である。97・98は表面が磨滅しており、判読不明である。

二次焼成

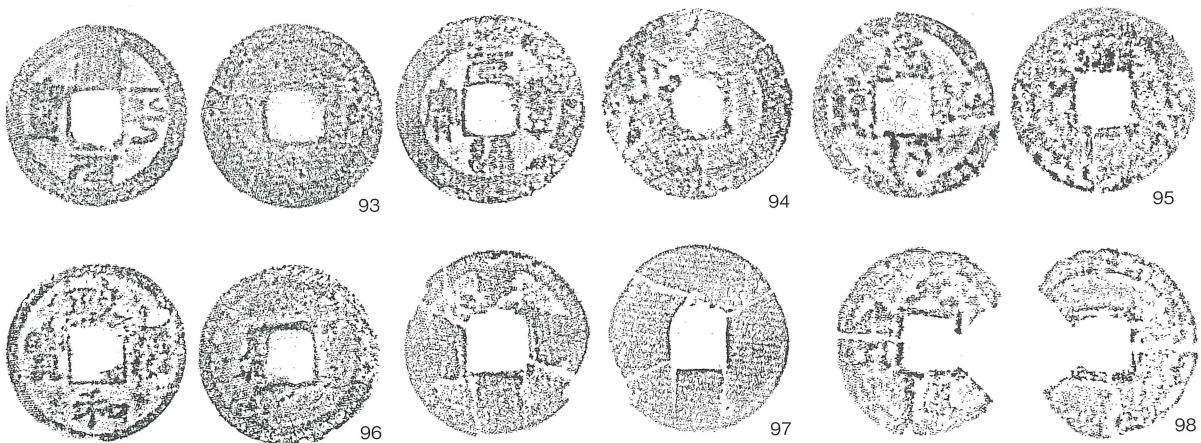
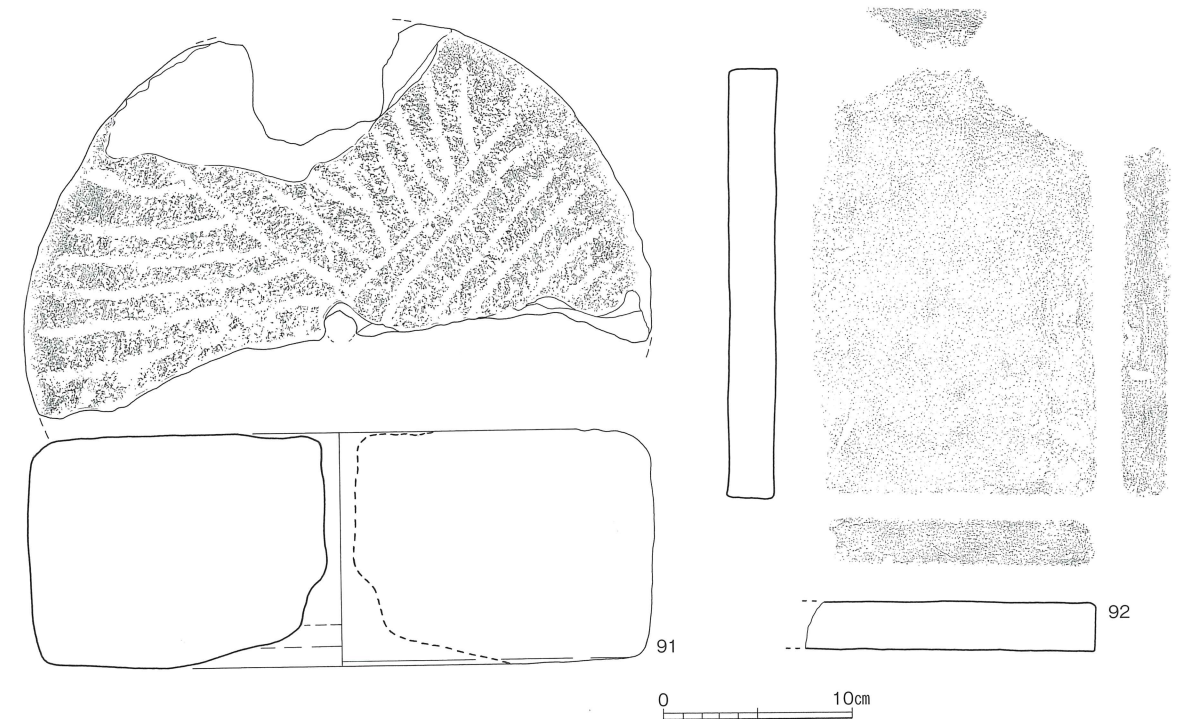
16世紀後葉、万寿寺西側は堀が埋め立てられ、町屋化する。SX202はその北端部に近く、町屋が焼失したものを片付け、堆積したものと理解できる。このため、貿易陶磁器などに二次焼成の痕跡が認められる。多量に出土する遺物は、周辺の廃棄物をまとめたものと考ええる。

時期は島津氏侵攻後の天正15年（1587）と想定でき、遺物はその直前と考える。

景德鎮窯系
漳州窯系

SX214 SX214はI・J-40・41で検出された焼土である。SX202の南側で検出された焼土層で、調査区の南側へ広がっている。出土遺物は第227・228図に図示した。1は景德鎮窯系で草花文の青花がある碗である。2は漳州窯系の青花碗で、外面には粗雑な草花文が描かれている。3は備前焼の小壺で、肩に粘土塊が付着する。耳が退化したものであろうか。また、同じ肩部にはヘラで「△」の文様を描いている。4は備前焼の播鉢である。内面には放射状の播り目が刻まれている。5は口径12.1cmの京都系土師器の完形品である。

6は瓦質土器の鉢である。口径は30.9cm、底径21cm、器高9.9cmである。7も瓦質土器である。口縁



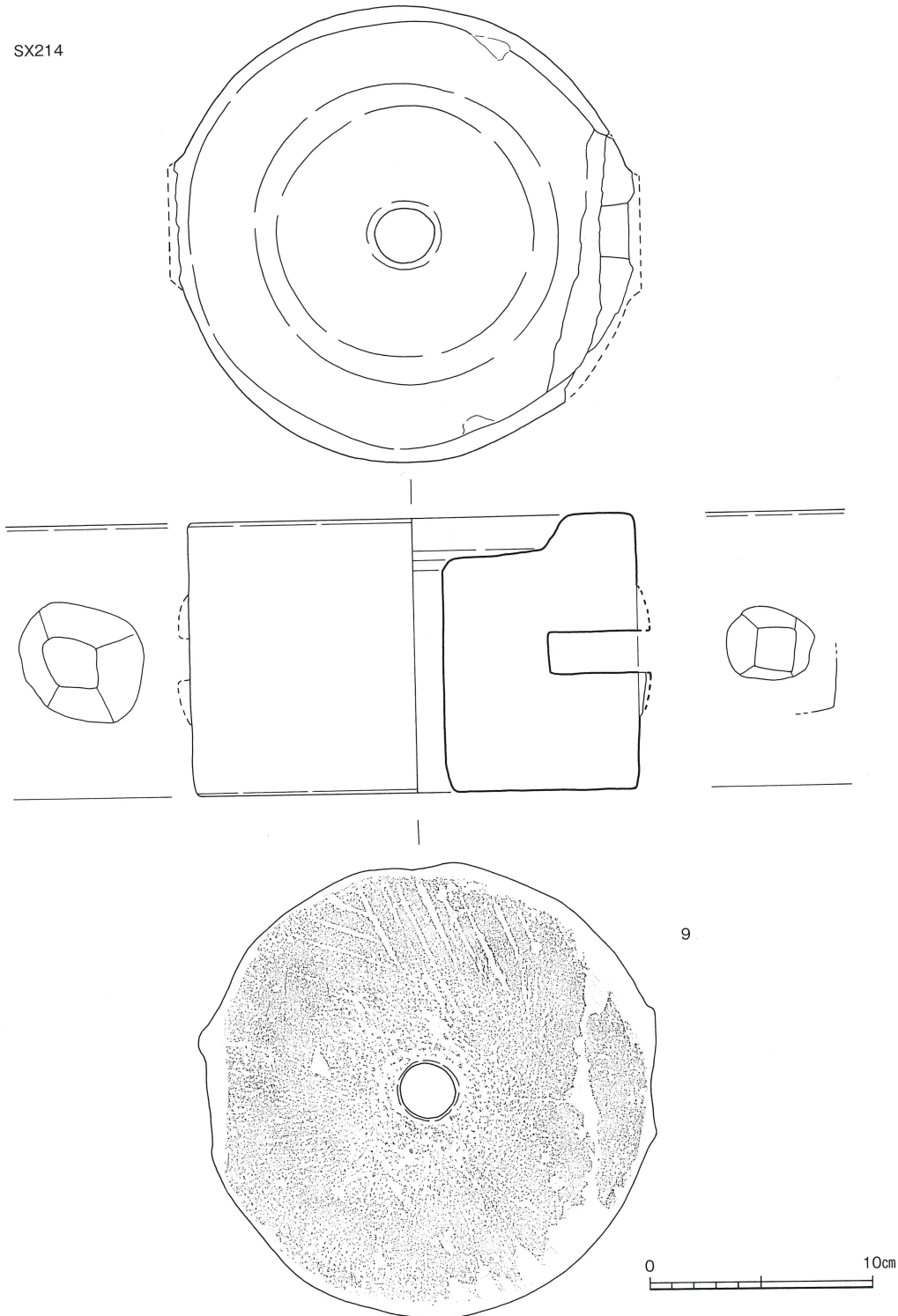
第226図 SX202出土遺物実測図⑦ 91・92(1/4) 93～98(1/1)

菊花文
茶臼

部は外側に肥厚し、断面はL字型になる。口縁部外面には菊花文のスタンプが押捺され、胴部には沈線が一条巡る火鉢である。8は粘板岩製の硯である。幅は8.4cmである。9は茶臼の上臼である。硬質の阿蘇凝灰岩製である。対象の位置に挽き臼の取手の棒を差し込む穴が台座とともに刻まれている。しかし、使用のためか全体に磨滅している。

SX214が形成した時期は、北に隣接するSX202と同じ起因によると考えられ、天正14年（1586）直後と想定する。

SX214



第228図 SX214出土遺物実測図（1/3）

ルツボ
ファイゴの羽口

SX258 第229図に図示したSX258は、SD200の下層近くで検出された焼土層に伴う遺物である。焼土は、南北約1.7m、東西約1mの範囲に広がり、その中や周辺から第230図に図示した遺物が出土している。1～7は京都系土師器である。口径は、1～5が8cm台であるが、6・7は11cm台である。8～14は鋳物を作製する道具であるルツボである。内面に銅滓が付着し、11は片口である。大きさは8の口径3.4cmが最小で、9～11は8cm台、13は13.2cm、14は10.8cmである。15はこうしたルツボとセットになるファイゴの羽口である。

五徳
小柄

16は螺旋状の青銅製品である。17は鉄製品で、五徳の一部と考える。断面は低い三角形をしている。18は両端が細くなる屈曲した青銅製品である。箆筭などの引き出しの取っ手に、類似する形態である。19も金銅製品で、小柄の一部と考える。20・21の銅銭の銭貨名は20が621年初鑄の「開元通寶」、21が1078年初鑄の「元豊通寶」である。

SX258は出土遺物から見ると、鑄造関係の施設の道具及びそれから生じた不要物を、SD200を埋め立てる際に、一括廃棄した状況である。焼土も鑄造作業中に生じたものとする。時期は16世紀後葉である。

ロクロ目土師器

SX348 第231図に図示したSX348は焼土層とは異なる。K31のSD363で検出されたロクロ目土器の出土状況である。遺物は小破片が多く、第231に図示した1～4はその代表的な遺物である。いずれもロクロ目土師器である。口径は1が4.8cm、2～4は10cm前後である。

時期は、15世紀末から16世紀初頭と考えられ、SD363の存続時期を示している。

SX409 SX409はJ36の第2南北街路上面で検出された焼土層である。出土した遺物である第231図5は備前焼の大甕の胴部破片である。表面に三本の線を縦と横に交差させた記号がヘラ描きされている。6の銅銭の銭貨名は1086年初鑄の「元祐通寶」である。

焼土の時期は、天正14年（1586）直後と想定する。

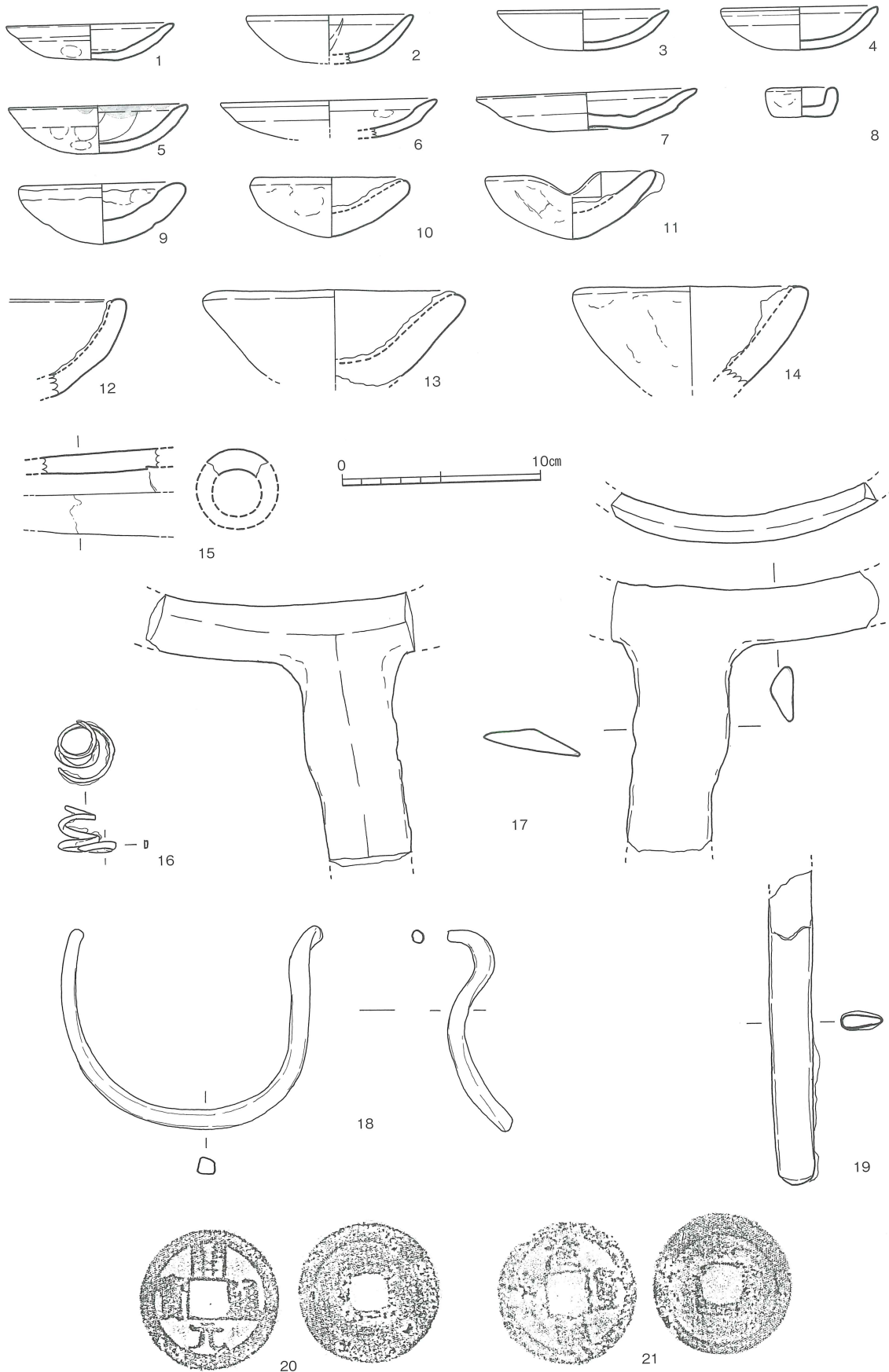
繭形分銅

SX420 SX420は、J33の第2南北街路の上面で検出された直径1m程度の焼土層である。出土遺物は第231図に図示した7と8がある。7は復元口径10cmの京都系土師器である。8は繭形分銅で、重さは0.7gである。

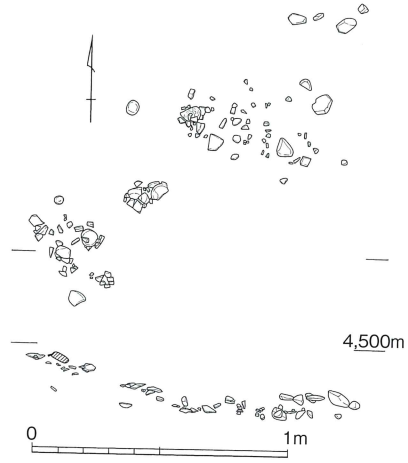
焼土の時期は、SX409と同じ状況であり、天正14年（1586）直後と想定する。



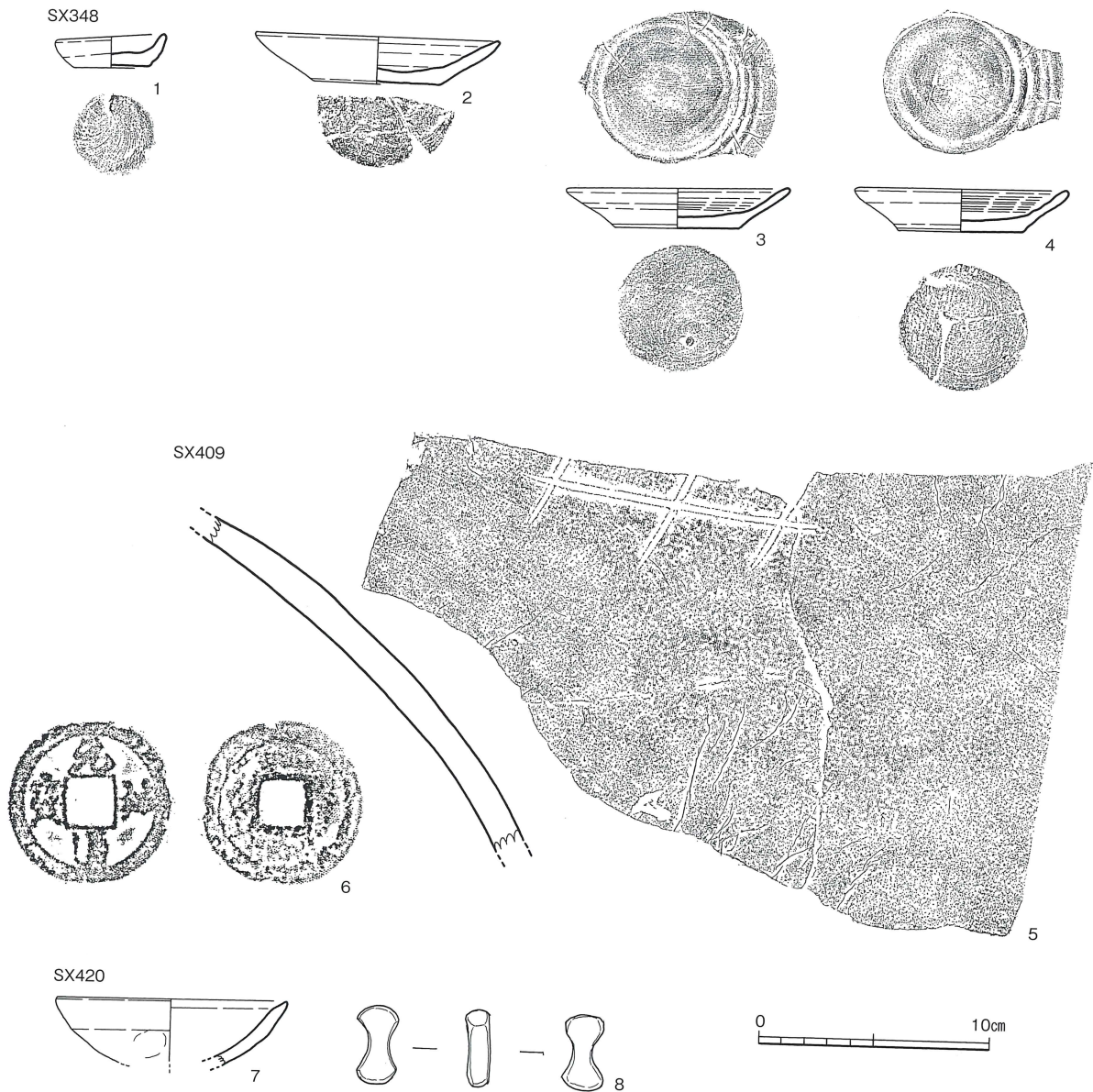
第229図 SX258 遺物出土状況実測図 (1/30)



第230図 SX258出土遺物実測図 (1/3) 16~19(1/2) 20・21(1/1)



第231図 SX348遺物出土状態実測図(1/30)



第232図 SX348・409・420出土遺物実測図(1/3) 6・8(1/1)

(8) 埴垣遺構

埴

SX203 第233図に図示したSX203は万寿寺の堀であるSD200を検出し、掘り下げ中にI40の上面で発掘した遺構である。遺構は、一部抜き取られた可能性もあるが、方形に埴で囲まれている。

遺構の規模はと構造は、東辺と西辺が約55cm、北辺と南辺は約60cmでやや長方形の囲いである。囲んだ内側は周辺よりやや深い。埴の遺存状態は、東辺が二枚、南辺も二枚残るが、西端が空いている。また北辺の状態は、西詰めで一枚残っている。西辺に埴は残されていない。しかし、周辺から、埴の破片が多く出土しており、本来は、四周を囲っていたものと想定できる。また、設置された方位は、四周はほぼ東西南北に面している。

漳州窯系

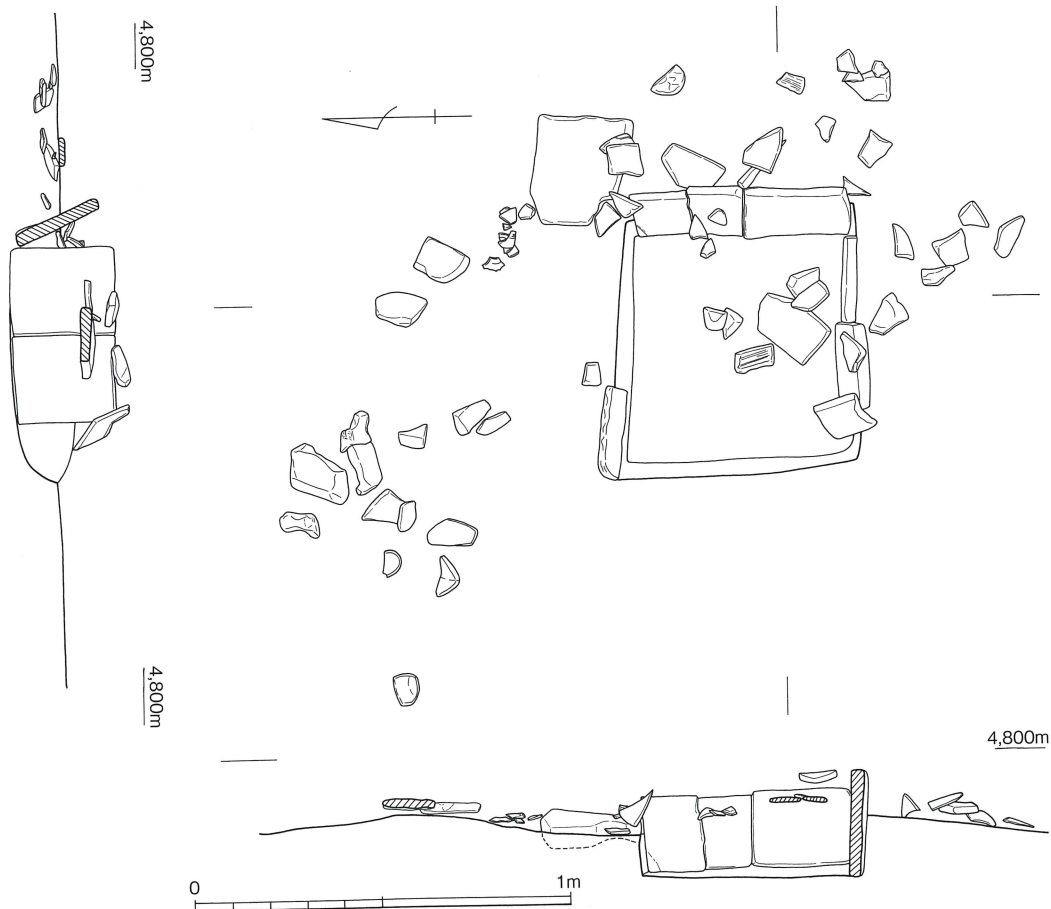
遺物は、遺構内や周辺から出土しており、第234・235・236図1～12に図示した。1は口径11.7cmで、見込みに青花の文様がある碁笥底の漳州窯系の皿である。小野編年の染付皿C群にあたる。2～5は京都系土師器で、口径は、2が9.4cm、3が8.2cm、4が11.2cmである。5は口径が12.2cmであるが、器高が高く、在地化した京都系土師器である。この土器の口縁部には煤が付着しており、器高が高いが灯明皿としても使用されている。6は口径7.2cmの底部に糸切り跡のある在地系土師器の皿である。この土器は混入と考える。

灯明皿

コビキ痕

7の埴は北辺の西端に残されていた埴である。その形状は、12cmの幅にトリミングされており、長さは23cmで、厚さは2cmである。器面はヘラなどで平滑に調整されているが、一部にコビキ痕が観察できる。8は阿蘇凝灰岩製の石造品で、両端と上部を欠くが、幅22.8cmで、上方に延び、L字状になる。

9・10は、南辺に並べられていた埴である。9の法量は長さ27.5cm、幅22.5cm、厚さは2.2cmである。表面はヘラ撫でなどで、平滑に仕上げられているが、最初に粘土塊から切り離した際に生じる斜め方



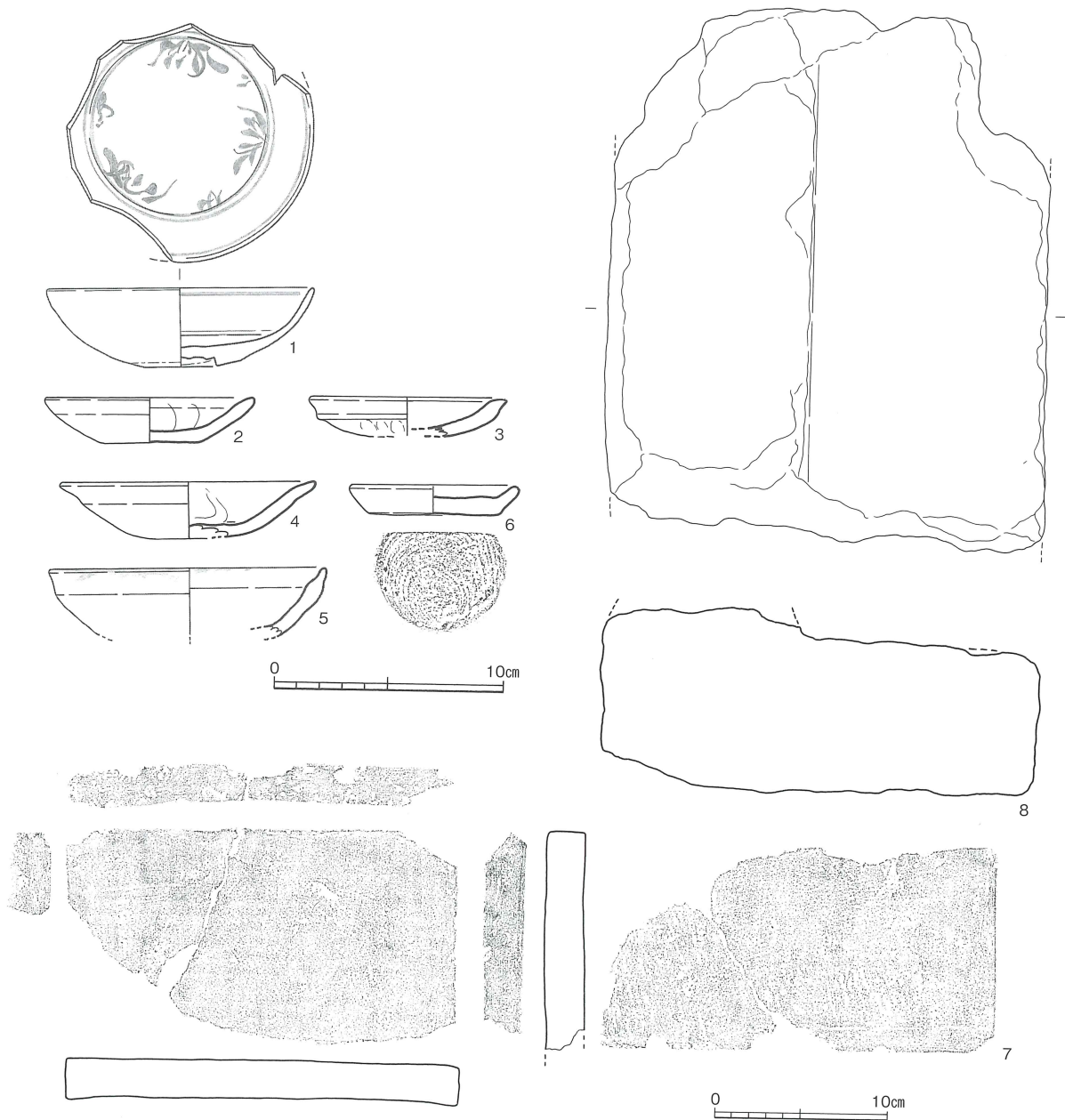
第233図 SX203 実測図 (1/20)

コビキ痕

向のコビキ痕も認められる。10の法量は、長さ27.2cm、幅22.6cm、厚さ2.1cmで、9とほぼ同じ規格である。器面調整も、同様でヘラや手撫でで平坦に仕上げられている。また、9ほど明確ではないが、斜め方向のコビキ痕が確認できる。

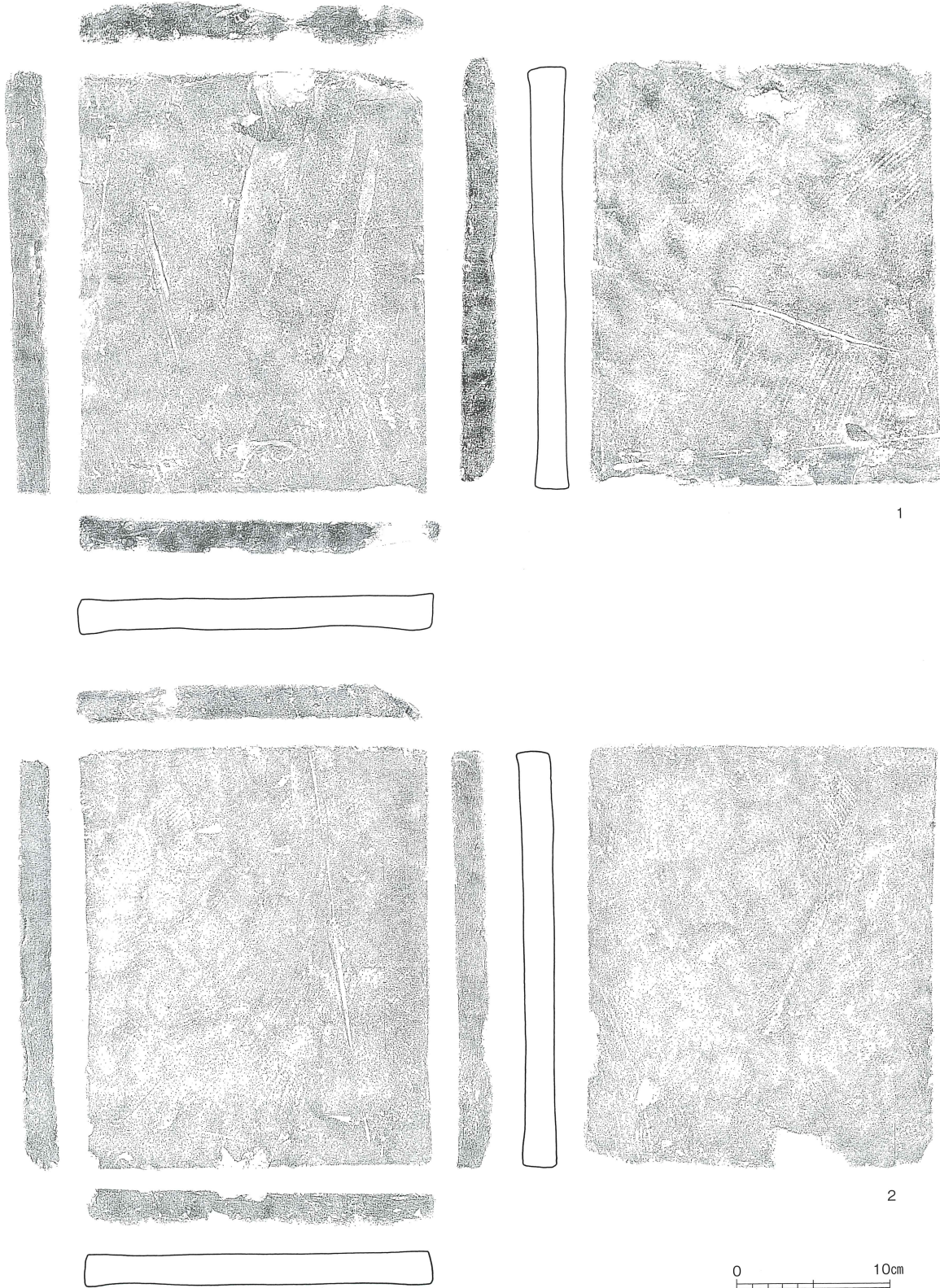
11・12は東辺に並べられていた塼である。11は二枚の内の北側に立てられていた塼で、法量は長さ27.5cm、幅23cm、厚さ2.3cmである。長軸方向を地表面に刺して並べている。器面は、先の2例と同様に、器面はヘラなどで平滑に仕上げられており、器面の一部には斜め方向のコビキ痕が残される。12の法量は、長さ27cm、幅22.2m、厚さ2.5cmである。器面調整は、他と同じようにナデなどで平滑に仕上げられているが、やはり、コビキ痕を認めることができる。

SX203の時期は、遺構の検出状況や、出土遺物から、16世紀後葉と考える。この時期の万寿寺西側は堀が埋め立てられ町屋化している。約250m南の調査である府内町跡第34・43次調査では、南北

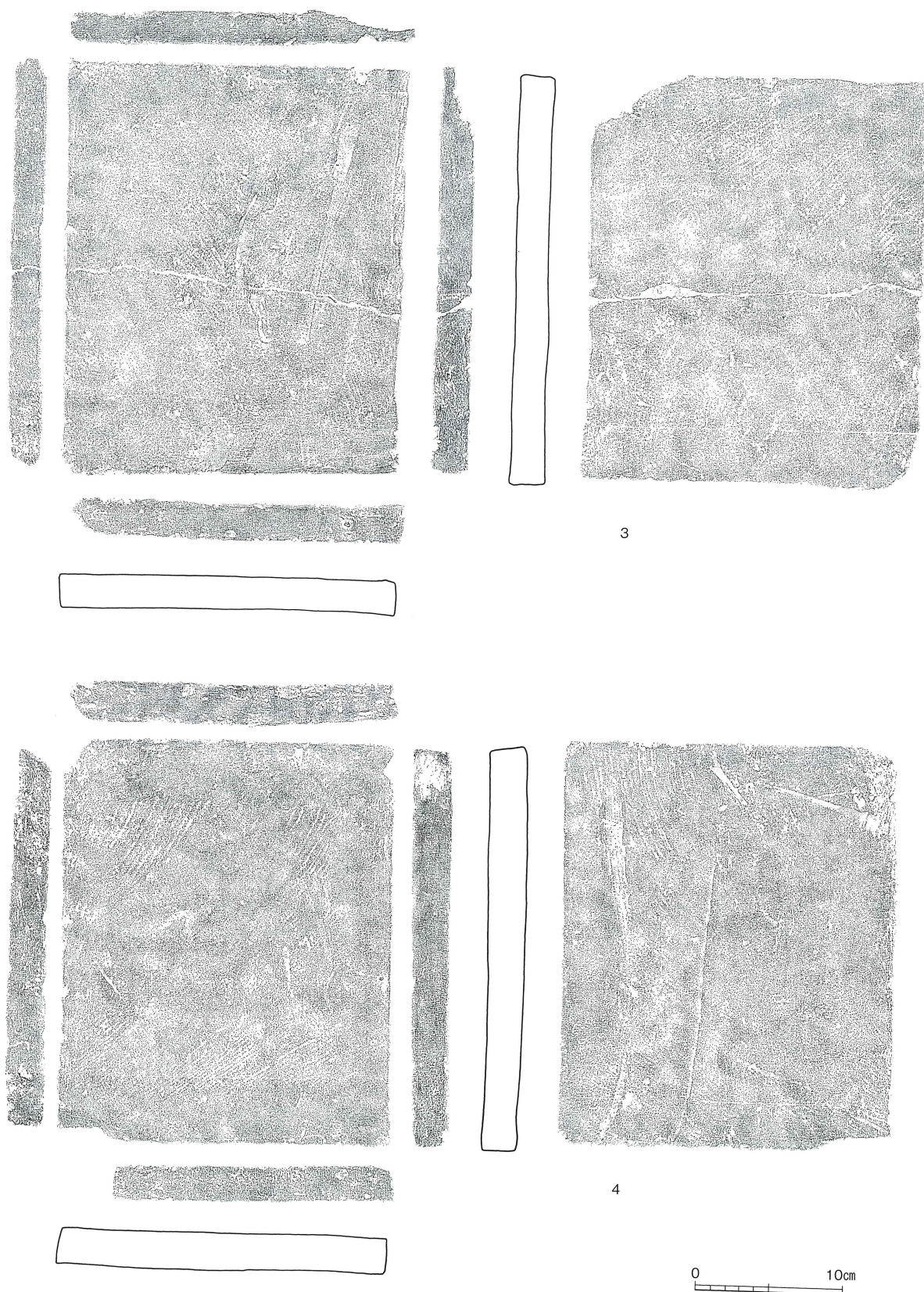


第234図 SX203出土遺物実測図① (1/3) 7(1/4)

方向に主軸を持つ礎石建物群が確認されている。府内町跡第51次調査でも礎石状の石が検出されており、SX203が検出された場所まで続いていることはほぼ間違いない。この遺構も、主軸が南北方向であることから、町屋遺構に関連すると考えられる。



第235図 SX203出土遺物実測図② (1/4)



第236図 SX203出土遺物実測図③ (1/4)

(9) 町屋整地層

御内町 SX345 「府内古図」によると、第2南北街路の東側は、御内町にあたる。調査区名では概ねK31～36にあたる。発掘調査では、包含層掘削後、第2南北街路と同じレベルで御内町にあたる部分の精査を行い、遺構の発掘を行なった。しかし、その面も客土によって整地されていることも判明した。そこでこの部分の掘さ下を行なった。その結果、下部から大規模な溝であるSD363が検出された。そこでSD363の検出面から御内町の遺構検出面までを、御内町の町屋整地層と理解し、SX345として遺物の取り上げを行なった。その主要出土遺物は第237・238図に図示した。

景德鎮窯系 第237図1・2は景德鎮窯系の青花碗である。外面には草花文が描かれている。3は景德鎮窯系の青花の皿で、染付皿E群である。4は白磁の輪花皿で、白磁皿D群である。底部の高台内には「天下太平」銘がある。5～7は大きさに差があるが、白磁皿である。小野編年の白磁皿C群である。8は口縁部が玉縁状に肥厚する薄手の小型の壺で、茶入れと考える。9は小型の瀬戸美濃産の天目茶碗で、底部は輪高台である。

備前焼 11・12・13は備前焼の播鉢である。11・12は口縁端部が尖り、内側に傾斜する。帯状に立ち上がる口縁外面には凹線が巡る。12は口縁部の上面が平坦で、外面には凹線が認められない。内面には3点とも放射状に櫛歯状の工具で播り目が入れている。

京都系土師器 13～32は京都系土師器である。口径は14・15・17が8cm台で、15・17はススが付着しており、灯明皿として再利用している。13・16・18・21は10cm前後である。19・20・22～29・31は12cm台、30は14cm、32は15cm台である。

ロクロ目土師器 第238図1・2はロクロ目土師器の口縁部であり復元口径は1が10.8cm、2は12.4cmである。3はSX420出土の破片とと接合する瓦質土器の碗である。断面三角形の高台が付く。5も同じタイプの瓦質土器の碗と考える。4は、3ヶ所に脚が付く瓦質土器の香炉である。

瓦質土器の香炉 6は棒状粘土の両端に孔を穿った土錘の破片である。7は唐草文が付く軒平瓦である。8は青銅製品で、器種は不明であるが、上面が五角形に面取りされている。9は鉄製品で、刀剣の一部である。10は青銅製品の鍵で、手許の部分には紐を通す穴があり、柄の部分は断面八角形である。挿入部分は扁平な長方形であり、先端には4つの突起がある。

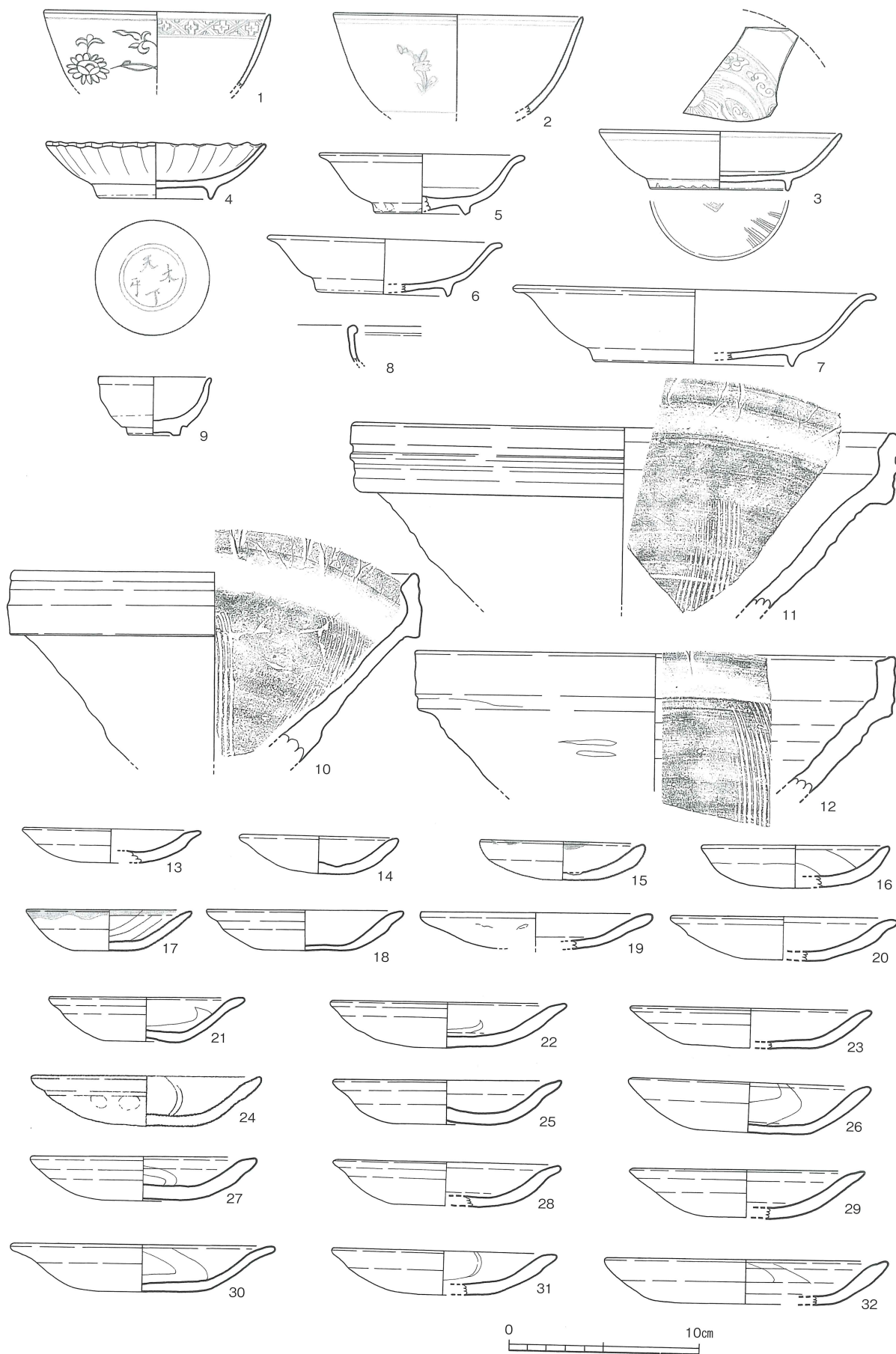
銅銭 11～15は出土した銅銭である。銭貨名は、11～14が1068年初鑄の「元祐通寶」であるが15は摩滅と錆のため、判読不能である。

御内町建設のための町屋整備層であるSX345の造成時期は、出土遺物に16世紀中葉と想定できる遺物が多く含まれる。特に、備前焼の播鉢には斜め播り目が見られず、第2南北街路整備より、古くなる可能性も十分考えられる。

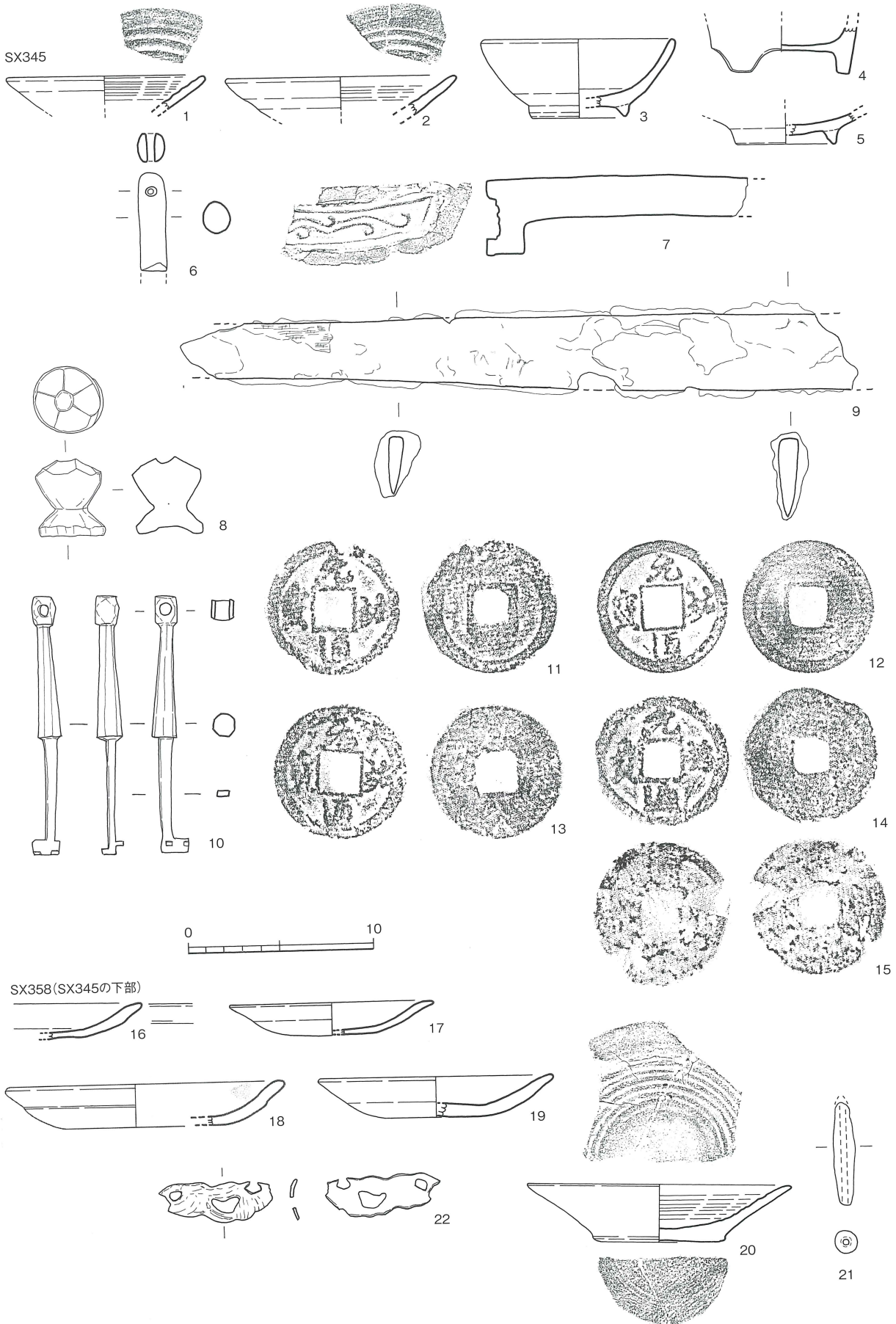
SX358 SX358はJ・K31で検出された遺物の集中出土部である。層位的な位置は、御内町の町屋整備土層を除去した後に確認された。北隅の一部で検出されたもので、SX345の下層とも、SD363の上層ともとらえることができる層である。

飾り金具 出土遺物は、第238図16～21に図示した。16～19は京都系土師器である。口径は17が11.0cm、18が14.8cm、19が12.5cmである。また、20は口径14.2cmのロクロ目土師器である。21は紡錘形の土錘で、重さは6.6gである。22は薄い青銅製品で、湾曲しており、飾り金具の一種であろう。この他、瓦質土器や備前焼の小破片なども出土している。

町屋整備層 SX358の検出場所や層序的な位置は、前項で報告したSX348と同じである。SX358の中でも遺物の集中箇所をSX358と認識したといえる。SX358で図示した京都系土師器の17は器壁が薄く、口縁部周辺を押さえも緩く、古い様相を持つ。また、新しい様相を持つロクロ目土師器も出土しており一部混入遺物があることを認めると、この時期は、16世紀前葉と考えられる。すなわち、SX345の「御内町」の町屋整備層の上限はこの時期と言える。



第237図 SX345出土遺物実測図 (1/3)



第238図 SX345・358出土遺物実測図 (1/3) 8・9・10・22(1/2) 11～15(1/1)

(10) 遺物包含層

府内町跡第51次調査は、表土として重機で近世水田面までを掘削した。その後に姿を現すのが遺構検出面まで堆積している土層で、調査区のはほぼ全面で観察される。この土層には遺物が多く含まれることから、遺物包含層として、主要な遺物を第239～248図に図示して報告する。

漳州窯系 第239図は貿易陶磁器を図示した。1～7は青花の碗の底部である。2・6は漳州窯系で、他は景德鎮窯系である。1・3～5は小野編年の染付碗E群である。7～10は青花の皿で、小野編年の染付皿E群である。7・9は漳州窯系、8・10は景德鎮窯系である。11・12は小野編年の染付皿F群である。13トカゲの貼付は外面にトカゲの貼付がある細首壺である。14は焼成の悪い青花の坏である。15は青磁の角皿である。16～21は龍泉窯系の青磁である。16・17・20は碗である。18は小壺、19は輪花皿、21は長頸壺である。22・23は白磁である。24～26は華南三彩であり、24・26は取っ手部分、25が蓋である。27は分厚い黒釉が垂れるようにかかっており、ミャンマー産である。28は古代の緑釉土器、29は焼締陶器である。

磁州窯系 第240図1・2は焼締陶器である。3は磁州窯系である。4・5は朝鮮王朝産で、4は内面に胎土目のある茶碗、5は船徳利である。6～15は備前焼である。6は徳利で、胴部にヘラ記号がある。7は口縁部が大きく内湾する容器で、取っ手の痕跡がある。8は高台付きの碗である。8は壺の肩部に付く耳である。10は口縁部が内湾する鉢である。11は注口部のある容器である。12は肩に櫛波状文のある壺である。13は胴部が算盤球状に張る容器である。12は播鉢、15は大皿である。

瀬戸美濃産 第241図1～6は瀬戸美濃産である。1はおろし皿、2～4は天目茶碗である。2・3は輪高台、4は折縁皿内反り高台である。5は小壺で、茶入れの可能性もある。6は折縁皿である。7は肥前系の茶碗である。備前系陶器 8は鉄釉のある茶碗である。9～41は京都系土師器である。口径は9～23・25・26が口径9cm前後で、24・28は10cm台、27・29～26は口径が11cm台から13cmである。11～13・15・25・27・32は内面にスガが付着しており、灯明皿として再利用されておる。37～41は口径が10～11cm台であるが、器高は3cm以上あり、在地化した京都系土師器の坏である。42は糸切り底の底部にスグレ状の圧痕が付く。京都系土師器との折衷形態である。43は径4.3cmの口縁部が直立する皿で、焼塩壺の蓋の可能性を持つ。44は焼塩壺と考える。45・46はロクロ目土師器の皿と坏である。

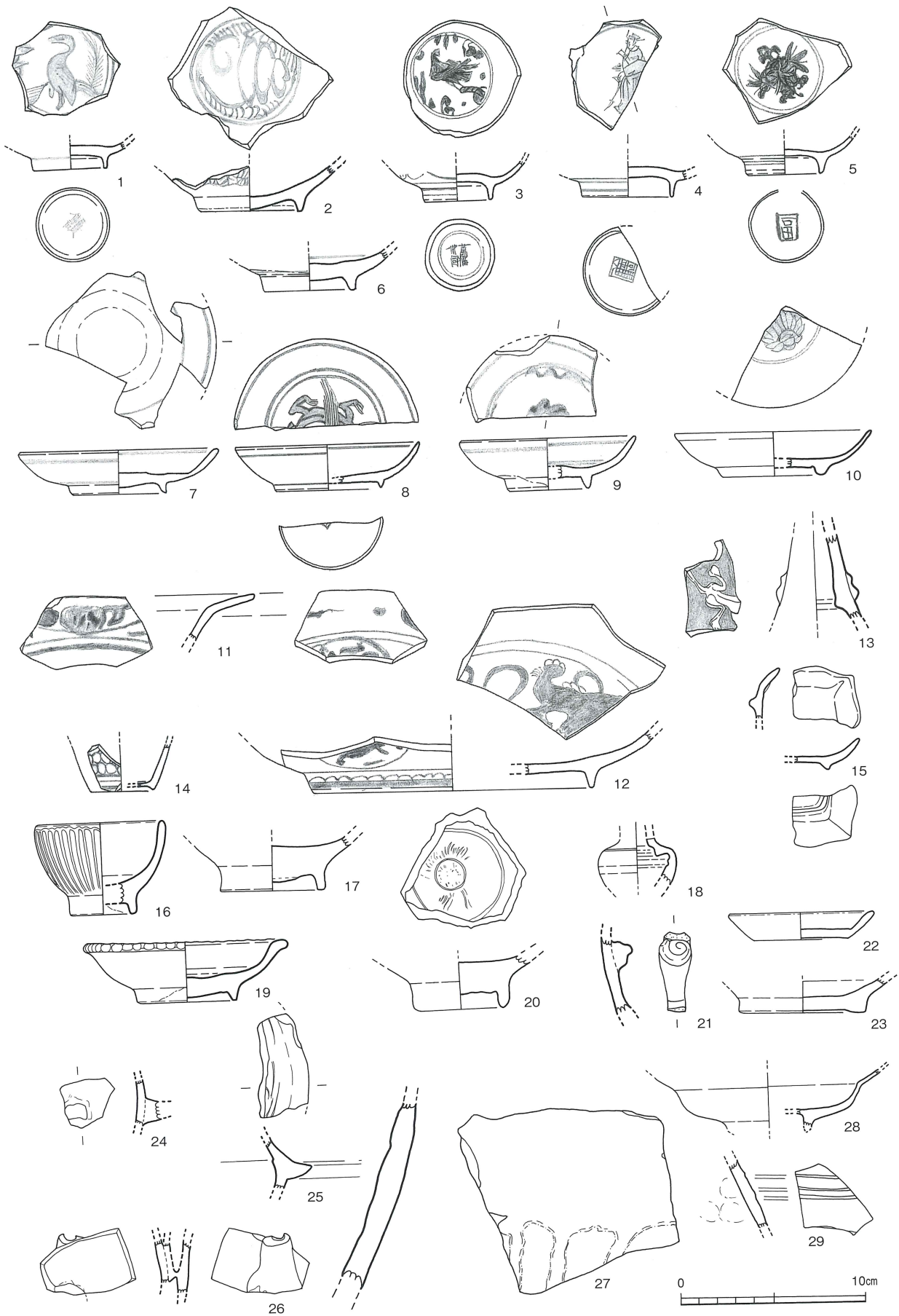
第242図1～11は口径8cm前後の在地系土師器の皿である。11は口径に対し底径が半分の在地系土師器の碗である。13～16は在地系土師器の坏である。17～20は瓦質土器である。17・20は口径が30cm以上の鉢である。17には高台が付く。18は高台が付く碗である。19は皿の可能性もある。

第243図1～37は土錘である。中でも1～30に図示した紡錘形をした土錘が最も多く出土する。完形品の重量は5g程度である。これより大型が31～37である。完形品の重量は、6g以上である。

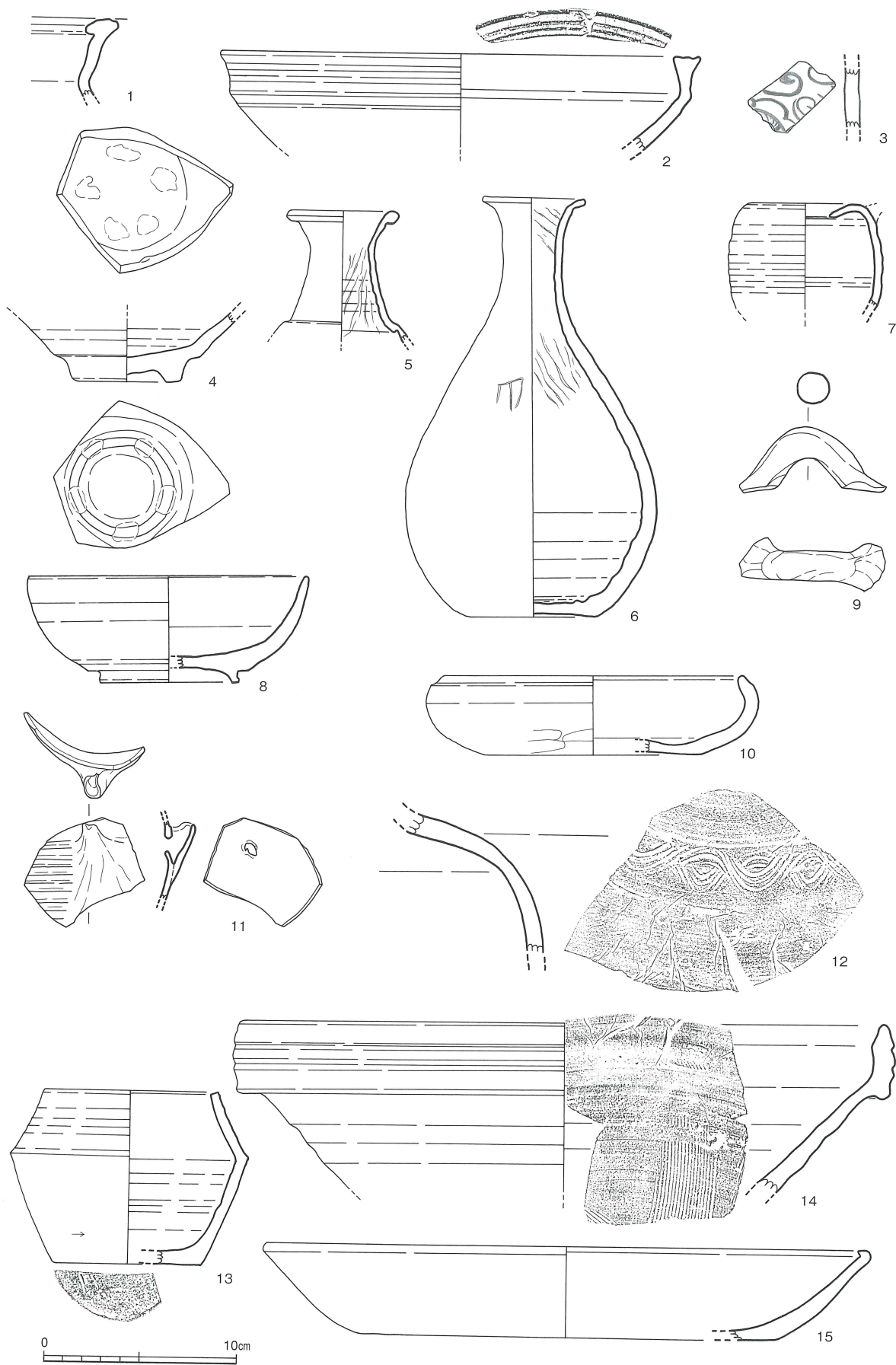
ミニチュア土器 38は器種不明の土製品である。ミニチュア土器の可能性もある。39～52は土師質土器や瓦質土器の破片を加工し、円形に仕上げた土製品である。側面は研磨されたものと、粗割りのままがある。53は両面に溝を付けた、扁平な粘土塊である。54は一方が尖る粘土製の棒である。鍋の脚であろうか。ガラス玉 55・56はガラス玉である。

銅鏡 第244図1・2は粘板岩製の硯である。3・4は砥石で、4は半分欠けている。3は砂岩系で、4は結晶片岩製である。5は水晶である。6は銅鏡であるが、上部に掛けるための小孔があり、鑄の部分は磨滅している。7は断面台形の青銅製品である。8～11も青銅製品であるが、9は環状、10は筒状、11は棒状であるが、器種は不明である。12は直径1.3cmの鉛玉で重量は12gある。

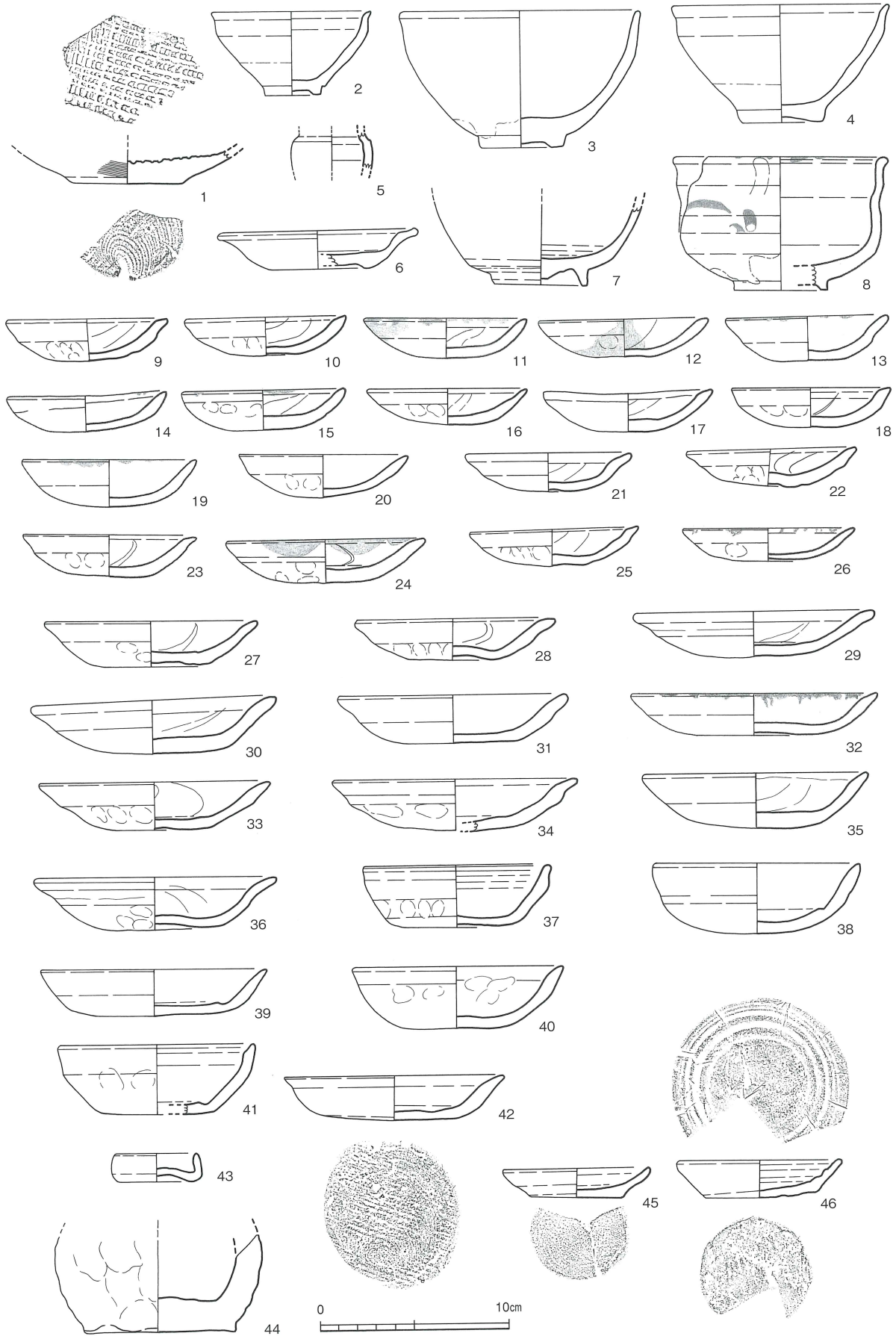
銅銭 第245図はI40でまとまって出土した銅銭である。1は990年初鑄の「淳化元寶」、2・3は1034年初鑄の「景祐元寶」、4～6は1038年初鑄の「皇宋通寶」、7は1064年初鑄の「治平元寶」、8は1068年初鑄の「熙寧元寶」、9・10は1078年初鑄の「元豊通寶」、11～13は1086年初鑄の「元祐通寶」、14は1094年初鑄の「紹聖元寶」、15・16は1017年初鑄の「天禧通寶」、17～19は1101年初鑄の「聖宋元寶」、20は



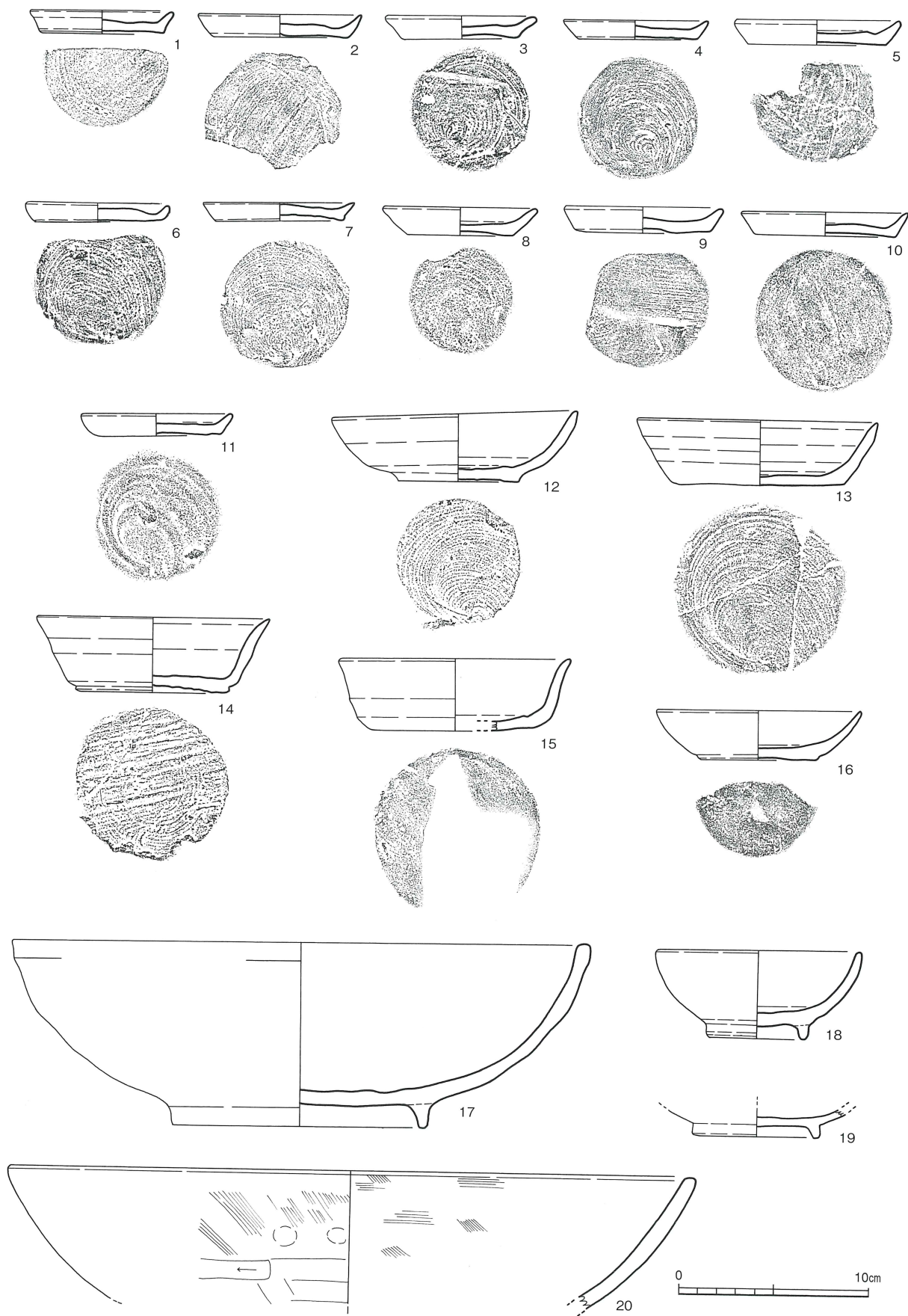
第239図 包含層出土遺物実測図① (1/3)



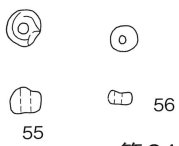
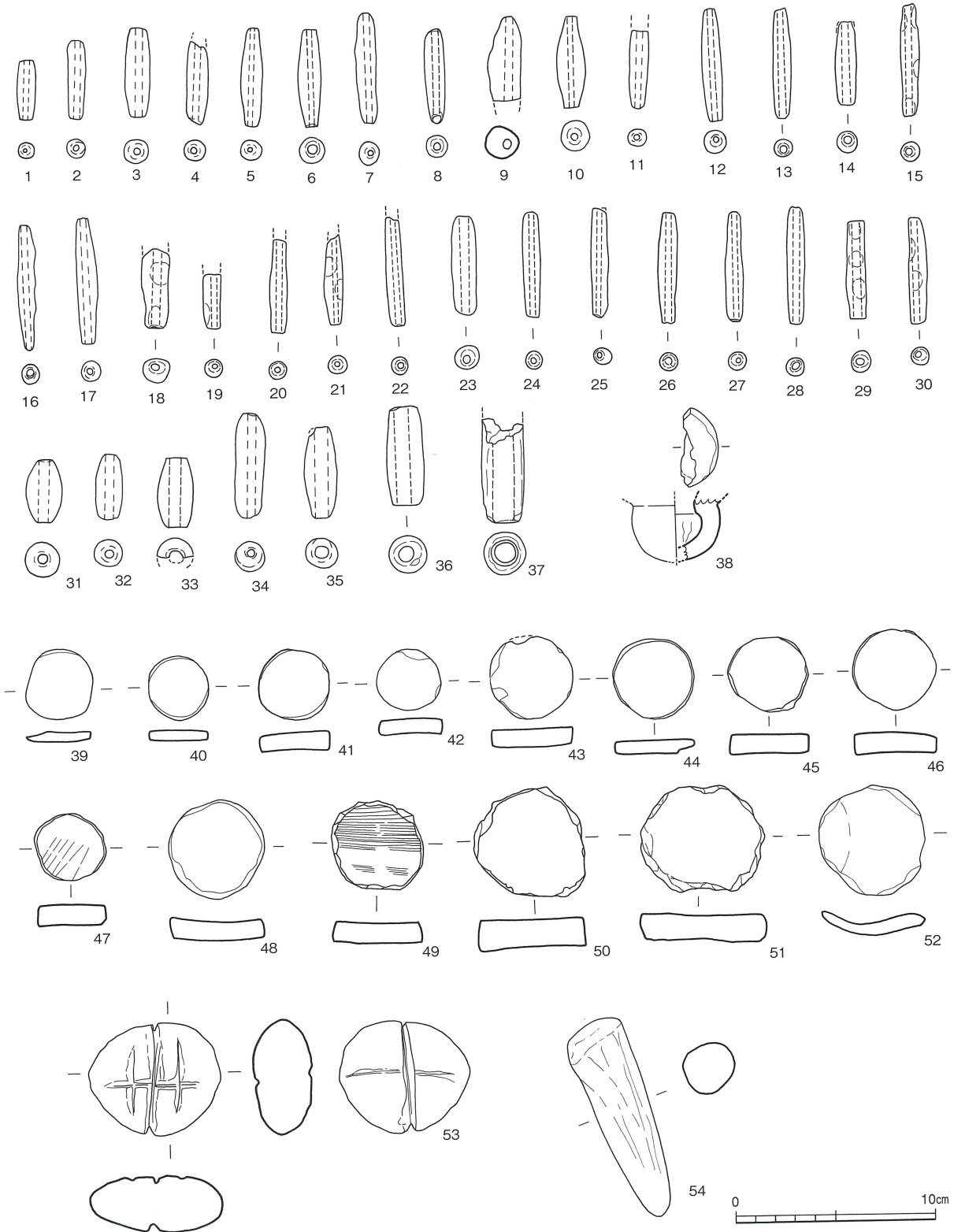
第240図 包含層出土遺物実測図② (1/3)



第241図 包含層出土遺物実測図③ (1/3)



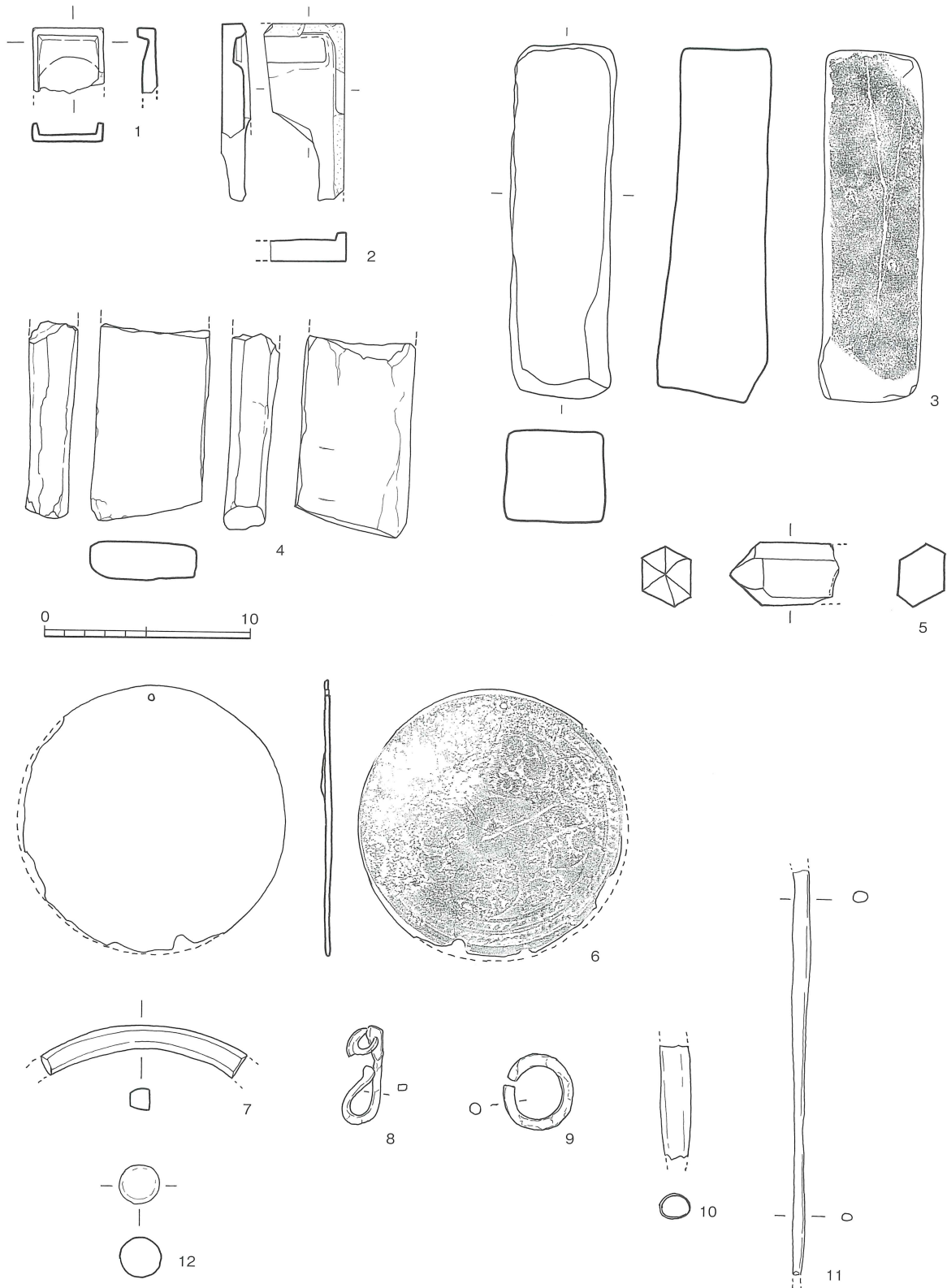
第242図 包含層出土遺物実測図④ (1/3)



第243図 包含層出土遺物実測図⑤ (1/3) 55・56(1/1)

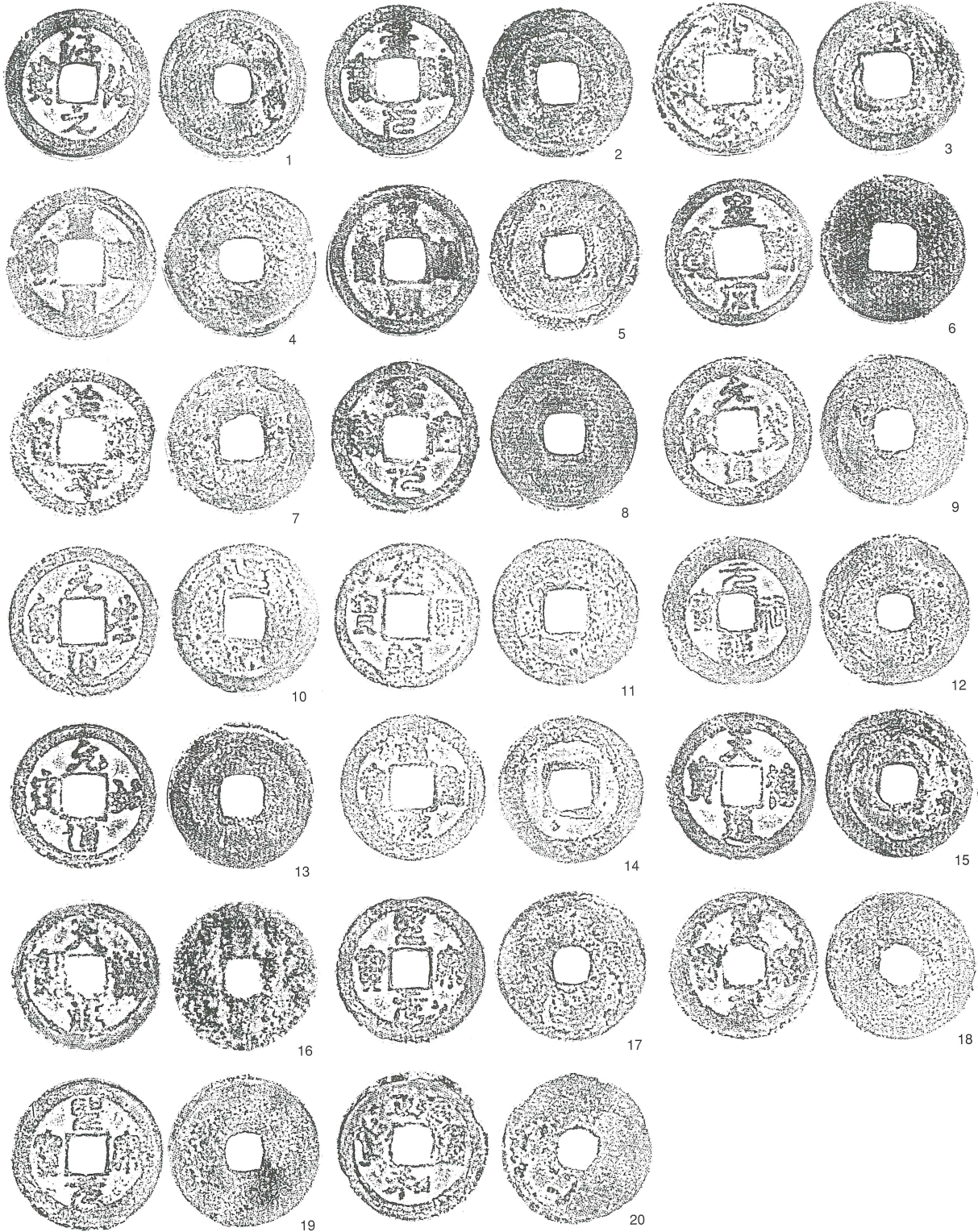
111年初鑄の「政和通寶」である。

第246・247図には銭貨名が判読できる銅銭を、第248図には判読不能な銅銭を図示した。こうした中には995年初鑄の「至道元寶」、1004年初鑄の「景德元寶」、1009年初鑄の「祥符元寶」は6枚で「祥符通寶」が3枚、1017年初鑄の「天禧通寶」2枚、1023年初鑄の「天聖元寶」3枚、1038年初鑄の「皇

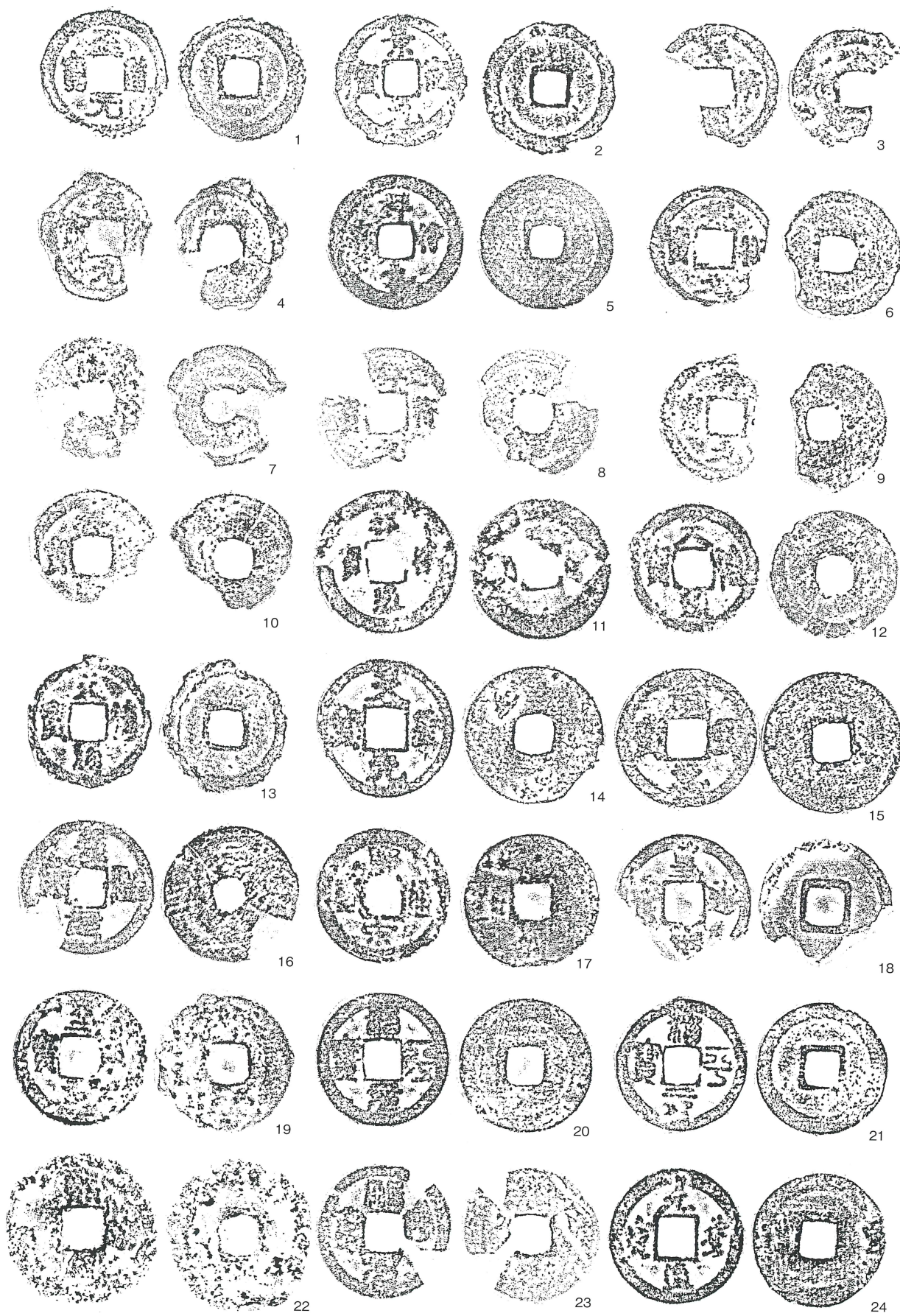


第244図 包含層出土遺物実測図⑥ (1/3) 5～11(1/2)

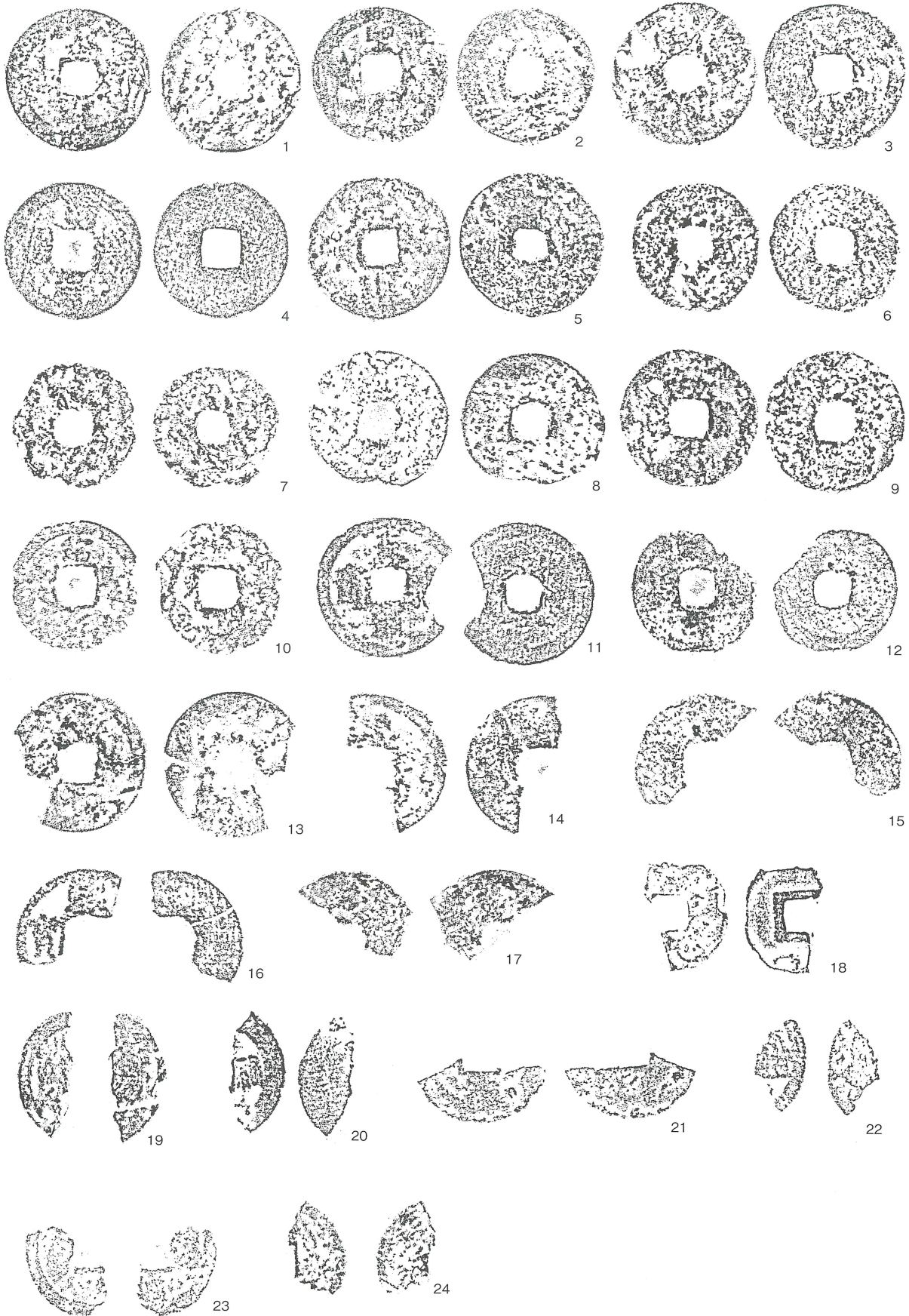
宋通寶」2枚、1054年初鑄の「至和元寶」、1064年初鑄の「治平元寶」2枚、1068年初鑄の「熙寧元寶」2枚、1078年初鑄の「元豐通寶」6枚、1098年初鑄の「元符通寶」2枚、1086年の「元祐通寶」6枚、1094年の「紹聖元寶」、1101年の「聖宋元寶」3枚、1368年初鑄の「洪武通寶」2枚、1636年初鑄の「寛永通寶」がある。個別の詳細は巻末の遺物一覧表に譲る。



第245図 包含層(I-40)出土遺物実測図⑦(1/1)



第246図 包含層出土銅銭実測図⑧ (1/1)



第248図 包含層出土銅銭実測図⑩ (1/1)